

# 筑後西部第2地区遺跡群(VII)

筑後市大字常用・志・尾島所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第51集

2003

筑後市教育委員会

## 筑後西部第2地区遺跡群(VII)

常用ニラバ遺跡	第1次調査
常用相割遺跡	第1次調査
常用野々下遺跡	第1次調査
志野添遺跡	第1次調査
志上婦計遺跡	第1次調査
志上婦計遺跡	第2次調査
志敷ノ内遺跡	第1次調査
志八反田遺跡	第1次調査
志西田遺跡	第1次調査
尾島下町裏遺跡	第1次調査
尾島前田遺跡	第1次調査

2003

筑後市教育委員会

## 序

この報告書は、平成9年度に発掘調査を行った筑後西部第2地区の各遺跡のうち、常用・志・尾島地区の調査の成果をまとめたものです。筑後西部第2地区のは場整備に伴って、多くの遺跡が発掘調査されました。その結果、この地域の歴史が少しずつひもとかれていくことを期待しております。

なお、現地での発掘作業の進行を優先させた結果、平成9年度に実施した発掘調査の報告書の刊行が今日になってしまったことをお詫びしなければなりません。当時は、筑後市内で4地区のは場整備事業が同時に施行されており、工事前の記録保存のための発掘作業に追われておりました。しかし、今後は累積している他遺跡の調査報告書についても順次刊行していく所存です。

この報告書が各方面で些少なりとも活用されれば、望外の喜びです。最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、ご助力ご協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

筑後市教育委員会  
教育長 牟田口和良

# 例 言

1. 本書は平成9年度に調査を行った筑後西部第2地区遺跡群の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は序章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会において収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測は奥村太郎、末吉隆弥（現 川崎町教育委員会）、小林勇作、永見秀徳が、遺物実測は佐々木寿代、小林、永見が作成した。遺構の全体配置図作成は、「志野添遺跡第1次調査」「志上婦計遺跡第1次調査」「志八反田遺跡第1次調査」を写測エンジニアリング株式会社に、「志上婦計遺跡第2次調査」を株式会社バスコに、それぞれ委託した。また、製図は横井理絵、佐々木、仲文恵、永見がおこなった。
4. 本書に使用した遺構写真は末吉、小林、永見が、遺物写真は小林、永見が撮影した。
5. 本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた仮番号を生かし、頭に調査回数、遺構種別を加えた。つまり第1次調査のS-1が溝状遺構であった場合、1SD01となる。
6. 本書に用いた方位はすべてG.N.を、水準はT.P.を基準としている。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から45°東にあたる場合、N-45°-Eと表記した。
7. 本書の執筆は第Ⅶ章9を小林が、その他は永見が担当した。なお、編集は永見がおこなった。

# 目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
第Ⅱ章	位置と環境	3
第Ⅲ章	調査成果	5
1.	常用ニラバ遺跡 第1次調査	5
2.	常用相割遺跡 第1次調査	17
3.	常用野々下遺跡 第1次調査	19
4.	志野添遺跡 第1次調査	21
5.	志上婦計遺跡 第1次調査	27
6.	志上婦計遺跡 第2次調査	31
7.	志蕨ノ内遺跡 第1次調査	34
8.	志八反田遺跡 第1次調査	35
9.	志西田遺跡 第1次調査	37
10.	尾島下町裏遺跡 第1次調査	43
11.	尾島前田遺跡 第1次調査	49
第Ⅳ章	まとめ	51



		立石 真二 (文化財学芸員)
		柴田 剛 (々々)
調査担当	社会教育係	小林 勇作 (文化財専門職)
		永見 秀徳 (々々)

(整理作業 平成14年度)

総括	筑後市教育委員会	教育長	牟田口 和良
		教育部長	下川 雅晴
庶務		社会教育課長	松永 盛四郎
		文化係長	成清 平和
		文化係	上村 英士 (文化財専門職)
			立石 真二 (文化財学芸員)
			柴田 剛 (々々)
調査担当		文化係	小林 勇作 (文化財専門職)
			永見 秀徳 (々々)

なお、発掘調査前の協議から、現地調査、報告書作成に到るまで、次の方々から貴重な御助言、御指導をいただいた。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)

佐田 茂 (佐賀大学)、水野正好 (奈良大学)、佐々木隆彦・小田和利・小川泰樹 (以上、福岡県教育庁)、大塚恵治 (八女市教育委員会)、山田元樹・坂井義哉 (以上、大牟田市教育委員会)、塚本映子 (三潁町教育委員会)、富永直樹・小澤太郎 (以上、久留米市教育委員会)、山村信榮 (太宰府市教育委員会)、末吉隆弥 (川崎町教育委員会)、木嶋眞治 (佐賀市教育委員会)、狭川真一 (元興寺文化財研究所)

## 第Ⅱ章 位置と環境

筑後市は福岡県の西南部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や低地である西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。

本書で報告する遺跡は、縄文時代から中世まで多岐にわたっている。ここでは、各時代において当地域がどのような位置を占めていたかを中心に概説したい。まず縄文時代であるが、本書では志野添遺跡の陥し穴等が該当すると思われる。筑後市内では、縄文時代の遺跡は市の南部域に集中することが判っている。ただし、例外的に陥し穴は全域に分布する。特に鶴田岸添遺跡や久恵内次郎遺跡では、多数の陥し穴を検出している。また、志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久恵中野遺跡等では、早期のものと思われる石組炉も発見されている。さらに、志野添遺跡の北500mには縄文時代の集落として著名な裏山遺跡がある。

弥生時代は、本書では常用ニラバ遺跡等が該当する。弥生時代の集落は中期初頭までは、縄文時代と同様に、市域の南半部に偏って分布する。中期も後半に入ると、北部の丘陵上にも展開するが、同時に低平地へも展開して遺跡数は爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、常用長田遺跡等が著名で、前期の溜井も津島九反坪遺跡で確認されている。中期後半以降の集落は、藏数森ノ木遺跡が特に著名である。また、低平地への展開例では津島血ヶ町遺跡がある。また、鶴田岸添遺跡では火災で消失した竪穴住居も確認されている。

古墳時代は本書に該当する遺跡がないので割愛するが、古代では志上婦計遺跡が該当する。筑後市域は、古代には交通の要衝として認知されていたようで、古代官道の西海道が南北に縦断する。発掘調査でも、鶴田中市ノ塚遺跡や山ノ井川口遺跡等で確認された。延喜式にある葛野駅は筑後市附近にあったと考えられていて、最有候補地は羽犬塚中学校附近である。羽犬塚中道遺跡では墨書土器等も多量に出土している。また、若菜森坊では竪穴式住居によって構成される大規模な集落が確認されている。

中世には、館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には社寺領を中心に荘園が発達し、その支配を基盤にした社会が形成される。これは当地域の特徴のひとつといえよう。本書では、尾島下裏町遺跡等が当該期の遺跡と考えられる。

### 参考文献

- 「梅島遺跡」 筑後市教育委員会 1992  
筑後市文化財報告書第1集 「狐塚遺跡」 筑後市教育委員会 1970  
筑後市文化財報告書第3集 「瑞王寺古墳」 筑後市教育委員会 1984  
筑後市文化財報告書第4集 「前津中ノ玉遺跡」 筑後市教育委員会 1987  
筑後市文化財報告書第5集 「田佛遺跡」 筑後市教育委員会 1988  
筑後市文化財報告書第6集 「藏数遺跡群」 筑後市教育委員会 1990  
筑後市文化財報告書第7集 「高江遺跡」 筑後市教育委員会 1991  
筑後市文化財報告書第8集 「欠塚古墳」 筑後市教育委員会 1993  
筑後市文化財報告書第10集 「四ヶ所古四ヶ所遺跡」 筑後市教育委員会 1994  
筑後市文化財報告書第17集 「羽犬塚射場ノ本」 筑後市教育委員会 1995  
「筑後市史」 筑後市史編纂委員会 1998



- |                 |            |             |             |              |
|-----------------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 瑞王寺古墳        | 2. 石人山古墳   | 3. 藏敷坂口遺跡   | 4. 藏敷森ノ木遺跡  | 5. 欠塚古墳      |
| 6. 久高島居遺跡       | 7. 羽大塚中道遺跡 | 8. 羽大塚山ノ前遺跡 | 9. 山ノ井川口遺跡  | 10. 上北島塚ノ本遺跡 |
| 11. 鶴田木屋ノ角遺跡    | 12. 鶴田西畑遺跡 | 13. 裏山遺跡    | 14. 鶴田岸添遺跡  | 15. 鶴田中市ノ塚遺跡 |
| 16. 筑後西部第2地区遺跡群 | 17. 常用長田遺跡 | 18. 梅島遺跡    | 19. 津島皿ヶ町遺跡 | 20. 津島九反坪遺跡  |

Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



## II. 調査成果

### 1. 常用ニラバ遺跡（第1次調査）

(1)はじめに

今回の調査では、水路部分のみの調査となったことから、当然の制約として非常に細長い調査区を設定せざるを得なかった。また現況の水路・道路の形状から、都合3つの調査区に分割することを余儀無くされた。本報告では、東から順に東調査区・中央調査区・西調査区とする。調査区全体のおおよその大きさは、幅3m延長約120mであった。そのため、遺跡の全体像についても、これを論及するには到らないことを、はじめにお断りしたい。現地での調査は平成9年5月21日から6月10日までおこなった。調査は永見秀徳が担当し、奥村太郎の協力を得た。



Fig.3 常用ニラバ遺跡第1次調査位置図 (1/2,500)

常用ニラバ遺跡 (第1次調査)

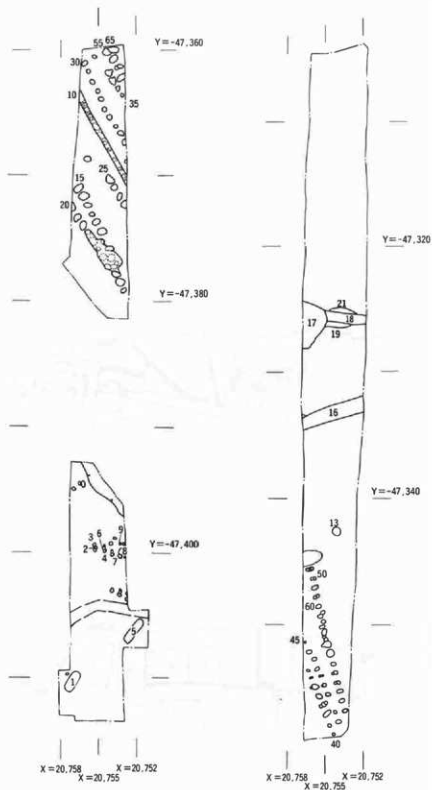


Fig.4 常用ニラバ遺跡 (第1次調査)  
略図 (1/300)

S-No	遺構番号	遺構種別/特記事項
1	1 SK 01	麻塞土坑 貯蔵穴転用か?
2		
3		
4		
5	1 SK 05	麻塞土坑 貯蔵穴転用か?
6		
7		
8	1 SX 55a	連続土坑
9		
10	1 SX 10	
11	1 SX 20b	連続土坑
12	1 SX 20c	連続土坑
13	1 SK 13	小土坑
14	1 SK 14	小土坑
16	1 SD 16	溝状遺構 地山掘り抜き暗渠あり
17	1 SK 17	小土坑
18	1 SD 18	溝状遺構
19		
20	1 SX 20	溝状遺構
21		
25	1 SX 25a	連続土坑
30	1 SX 30	連続土坑
35	1 SX 35	連続土坑
40	1 SX 40	連続土坑
45	1 SX 45	連続土坑
50	1 SX 50	連続土坑
55	1 SX 55	連続土坑
60	1 SX 50	連続土坑
65	1 SX 65	連続土坑

Tab.2 常用ニラバ遺跡  
(第1次調査) 遺構番号一覧

(2)遺構

今回の調査では、廃棄土坑・連続土坑・溝状遺構などを確認した。以下、遺構種類別に報告したい。

廃棄土坑

廃棄土坑は2基を確認した。いずれも弥生時代のもと考えている。

1SK01 (Fig.17, Pla.2・3)

西調査区の西端北側にある。遺構の約半分が調査区外に展開していたが、調査区を拡張して完掘した。長軸1.9m短軸0.7m残存深さ0.4mであった。また、主軸はN-52°-Wである。

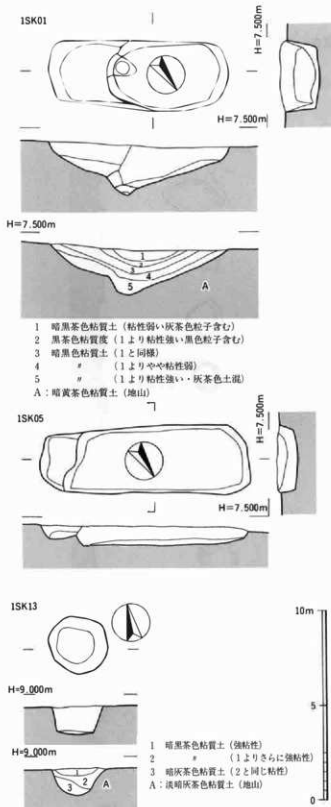


Fig.5 土坑実測図 (1/40)

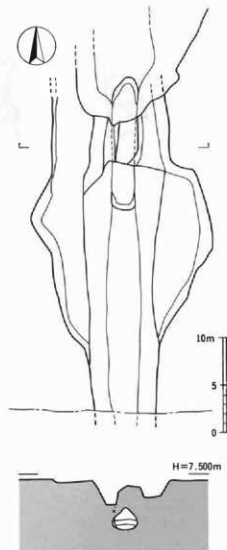


Fig.6 1SD18実測図 (1/40)

常用ニラバ遺跡（第1次調査）

平面形態は細長い長方形で、南東側の短辺には底面より0.15m程高いテラスを地山削り出しによって形成している。埋土の堆積は、おおむねレンズ状堆積の傾向を示すが、埋土のグループ化はできなかった。

1SK05 (Fig.5, Pla.4)

西調査区の中央南側にある。遺構の約半分が調査区外に展開していたが、調査区を拡張して完掘した。長軸1.9m短軸0.7m残存深さ0.4mであった。また、主軸はN-58°-Wである。

平面形態は細長い長方形で、南東側の短辺には底面より0.15m程高いテラスを地山削り出しによって形成している。

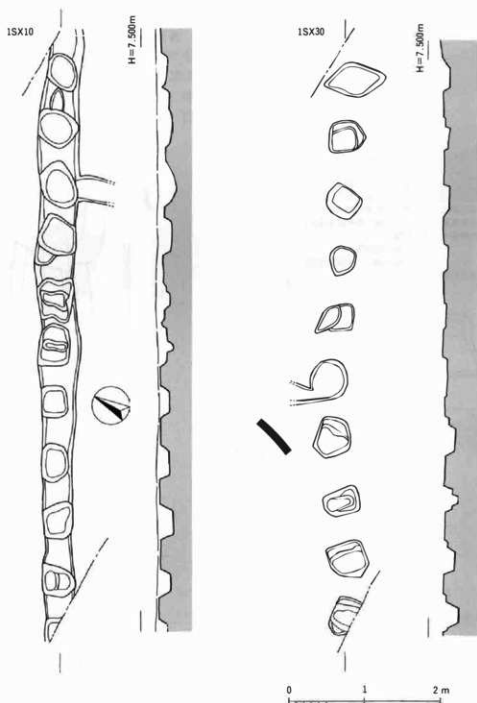


Fig.7 1SX10・1SX30実測図 (1/50)

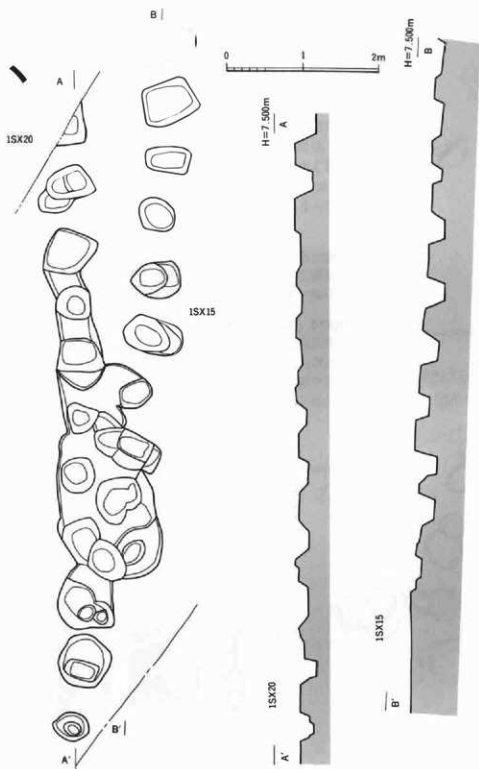


Fig.8 1SX15・1SX20実測図 (1/50)

溝状遺構

東調査区で2条確認した。

1SD16 (Fig.17・Pla5)

東調査区の東よりに位置する。幅は約1mある。深さは約0.2mを測り、断面は緩やかな逆台形を呈している。また、主軸はN-15°-Wである。底面は1SD18とは異なり、ほぼ平坦である。一定方向への傾斜は認められない。

1SD18 (Fig.6・Pla5)

東調査区の東端に位置する。幅は約1mある。深さは約0.2mを測り、断面はU字状を呈しているが、調査区の中程で径0.2mの地山掘り抜きの暗渠となっている。また、主軸はN-00°-Wである。底面は1SD16とは異なって2段に掘り下げてある。一定方向への傾斜は認められない。

連続土坑

連続土坑は調査区の東側に偏って14条を確認した。いずれも時期は不明である。

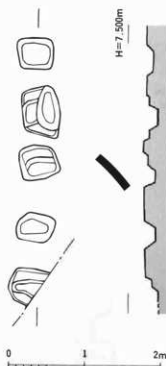


Fig.9 1SX25実測図 (1/50)

1SX10 (Fig.7, Pla.6)

中央調査区の中央附近にあり、主軸の方位はN-63°-Eである。検出時には溝状遺構として認識していたが、底面から土坑が連続した状態で検出されたため、ここでは連続土坑として取り扱う。土坑上面までの深さは概ね0.10mである。また、土坑の上面から底面までの

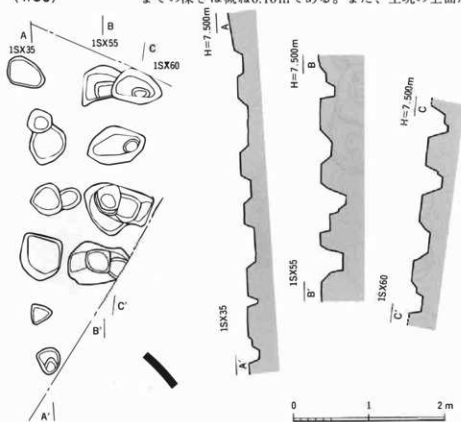


Fig.10 1SX35・1SX55・1SX60実測図 (1/50)

深さは概ね0.15mであるが、0.1mから0.2mのものがある。

**1SX15 (Fig.8, Pla.6)**

中央調査区の西端附近にあり、主軸の方位はN-67°-Eである。土坑の深さは概ね0.15mであるが、0.1mから0.25mのものがある。

**1SX20 (Fig.8, Pla.6)**

中央調査区の西端附近にあり、主軸の方位はN-60°-Eである。土坑の深さは概ね0.2mであるが、0.15mから0.3mのものがある。

**1SX25 (Fig.9, Pla.6)**

中央調査区の中央附近にあり、主軸の方位はN-45°-Eである。土坑の深さは概ね0.2mであるが、0.15mから0.2mのものがある。

**1SX30 (Fig.7, Pla.6)**

中央調査区の東よりにあり、主軸の方位はN-34°-Eである。土坑の深さは概ね0.1mであるが、0.05mから0.2mのものがある。

**1SX35 (Fig.10, Pla.10)**

中央調査区の東端附近にあり、主軸の方位はN-45°-Eである。土坑の深さは概ね0.1mであるが、0.1mから0.15mのものがある。

**1SX40 (Fig.11, Pla.7)**

東調査区の西端附近にあり、主軸の方位はN-20°-Eである。土坑の深さは概ね0.1mである。

**1SX45 (Fig.11, Pla.7)**

東調査区の西端附近にあり、主軸の方位はN-67°-Eである。土坑の深さは概ね0.1mであるが、0.05mから0.15mのものがある。

**1SX50 (Fig.12, Pla.7)**

東調査区の西端から中央附近にあり、主軸の方位はN-79°-Eである。土坑の深さは概ね0.1mであるが、0.05mから0.25mのものがある。

**1SX55 (Fig.10, Pla.10)**

中央調査区の東端附近にあり、主軸の方位はN-56°-Eである。土坑の深さは概ね0.15mである。

**1SX60 (Fig.12, Pla.7)**

東調査区の西端から中央附近に1SX50と重なるようにしてあり、主軸の方位はN-75°-Eである。1SX50との切り合い関係が不明確で、前後関係は判然としない。土坑の深さは概ね0.1mであるが、0.15mから0.2mのものがある。

**1SX65 (Fig.10, Pla.10)**

中央調査区の東端附近にあり、主軸の方位はN-66°-Eである。土坑の深さは概ね0.25mであるが、0.2mから0.25mのものがある。

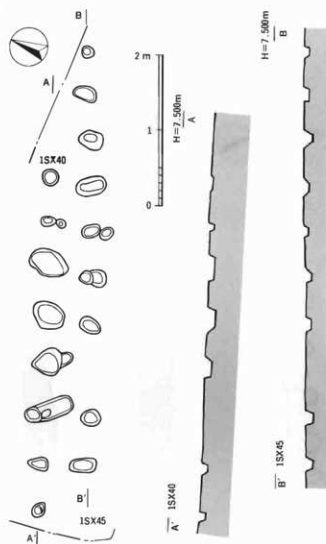


Fig.11 1SX40・1SX45実測図 (1/50)

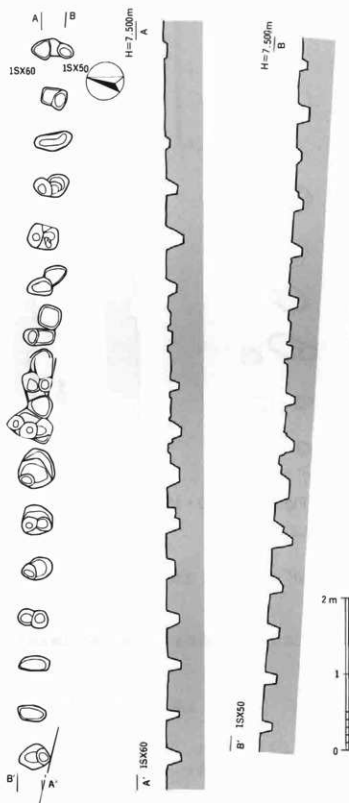


Fig.12 1SX50・1SX60実測図（1/50）

1SX70 (Fig.17)

西調査区の中央附近にあり、主軸の方位はN-18°-Eである。土坑の深さは概ね0.05mであるが、0.05mから0.1mのものがある。

1SX75 (Fig.17)

西調査区の中央附近にあり、主軸の方位はN-13°-Eである。土坑の深さは概ね0.1mであるが、0.05mから0.2mのものがある。

(3)遺物

総量でバンコンテナー2箱の遺物が出土したが、廃棄土坑出土遺物以外は小片が多かった。特に中央調査区では遺物がほとんど認められなかった。以下、遺物別に報告する。

1SK01出土遺物 (Fig.13・15・16、Pla.8・9)

弥生土器が出土した。いずれも、4層からの出土である。11・12は甕である。13は壺である。

1SK13出土遺物 (Fig.14、Pla.8)

土師器が出土した。2は高坏である。3は小型丸底壺である。

1SK17出土遺物 (Fig.14、Pla.8)

弥生土器片・玉随片・須恵器・土師器・瓦器が出土した。4は須恵器の甕である。6は土師器の土鍋である。5は瓦器の椀である。

1SD16出土遺物 (Fig.15、Pla.8)

土師器片と黒色土器が出土した。7は黒色土器Aの椀である。8は黒色土器Bの椀である。

1SD18出土遺物 (Fig.15、Pla.8)

弥生土器片・須恵器片・片岩と土師器が出土した。9は土師器の坏である。

1SX55出土遺物 (Fig.15、Pla.8)

弥生土器片・土師器片・須恵器がある。10は須恵器の坏である。

(4)小結

今回の調査は、常用日田行遺跡の東に隣接した位置であったため、同様に弥生時代の集落跡、それも廃棄土坑を中心に



した遺構を予想していた。西調査区と中央調査区の間には、現況の用悪水路が北東から南西に流れている。実際は、この水路を境に、東西で遺構の出土状況が異なった様相を呈していた。

西側は当初の予想通りに弥生時代の廃棄土坑を2基確認した。これは常用日田行遺跡から連続する弥生集落の一部と思われ、そちらの報告と合わせての考察が必要であろう。この廃棄土坑も常用長田遺跡での事例から推察すると、貯蔵穴からの転用の可能性を考えなければならないだろう。しかし、今回の調査では常用長田遺跡と比べて残りが悪く、詳細な情報は得られなかった。

それに対し、東側は連続土坑を多く確認した。この連続土坑は道路の痕跡とみなす意見もあるが、今回の調査では判然としなかった。しかし、連続土坑がほぼ方位を一にして数条認められる状況には非常に興味深いものがある。また、暗渠状とした水路遺構も興味深い。こういった設備を設置した意図が良く理解できない。類例の増加を期待する。

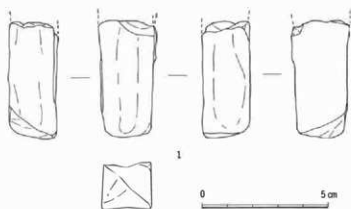


Fig.13 1SK01出土遺物実測図 (2/3)

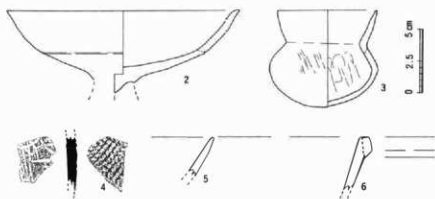


Fig.14 その他の土坑出土遺物実測図 (1/3)

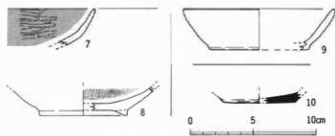


Fig.15 溝・不明遺溝出土遺物実測図 (1/3)

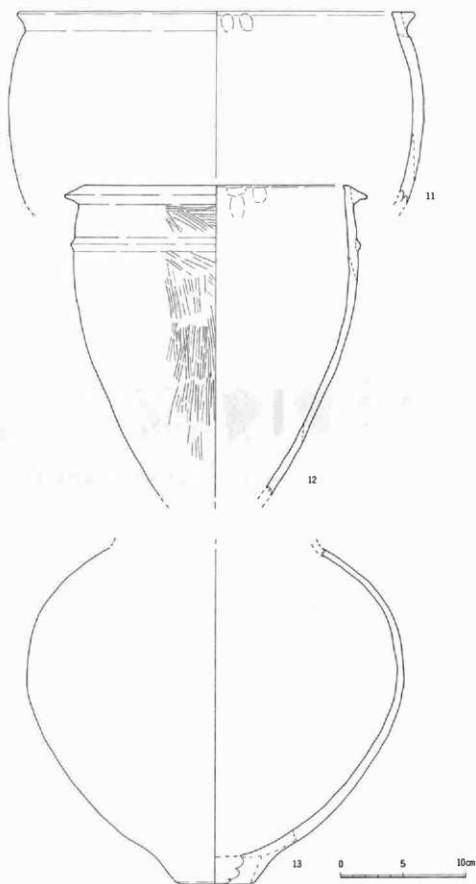


Fig.16 1SK01出土遺物実測図 (1/3)

常用ニラバ遺跡 (第1次調査)

S.No.	遺跡番号	層位	弥生土器	土師器	須恵器	黒色土器	瓦器	石器等	備考
1	1 SK 01	I	甕・壺・鉢						
1	1 SK 01	I	甕						
1	1 SK 01	II	甕						
1	1 SK 01	III	甕						
1	1 SK 01	IV	甕・壺						
1	1 SK 01	V							遺物なし
2			片						
3			片						
4			片	片					
5	1 SK 05		蓋・甕					黒曜石剥片	
6			片						
7									遺物なし
8	1 SX 55a		片	片	環				
9				皿					
10									遺物なし
11	1 SX 20b		片						
12	1 SX 20c							サヌカイト石核	
13	1 SK 13			埴・高坏・甕・片					
14	1 SK 14			片					
16	1 SD 16			片		八角			
17	1 SK 17		片	土鍋・片	甕・環c	碗		玉髓剥片	
18	1 SD 18		片	環・片	片			片岩	
19								片岩	
20	1 SD 20								遺物なし
21				皿(煮切り)・片					
25	1 SX 25a		片						
30	1 SX 30								遺物なし
35	1 SX 35								遺物なし
40	1 SX 40								遺物なし
45	1 SX 45								遺物なし
50	1 SX 50								遺物なし
50b	1 SX 50b		甕?						
表土	表土		片	片	片				

Tab.3 常用ニラバ遺跡出土遺物一覧表

No.	遺跡番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形状	残存	口縁部	体外部	体内部	内底面	外底面	色調	調子	焼成	口縁部形状	備考	R ka
1	1 SK 01		砂切	砥石						口縁欠損									重量32.0g	1
2	1 SK 13	土師	高坏		18.4			杯部1/4	横ナテ	横ナテ	横ナテ				明白褐色	密	良	わずかに外反	口縁部の割離が明確に異なる	1
3	1 SK 13	土師	甕		7.6	丸底	7.6	1/4杯形	横ナテ	横毛	ナテ				暗褐色	密	良	やや外に開く		2
4	1 SK 17	黒色	甕					体部細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ				外: 淡白灰色 内: 明褐色	密	良好			3
5	1 SK 17	瓦器	瓶					口縁細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ				外: 暗茶褐色 内: 淡灰褐色	密	良	外方にひらぐ		2
6	1 SK 17	土師	土鍋					口縁細片	横ナテ	横ナテ	不明				淡褐色	やや密	良		玉髓核口縁	1
7	1 SD 16	黒色	瓶					口縁細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ				外: 淡褐色 内: 淡灰褐色	密	良	わずかにひらぐ	原色土器A	1
8	1 SD 16	黒色	瓶		7.0			底面1/8	ナテ	磨き	ナテ				外: 淡茶白色 内: 淡灰褐色	密	良		高台高さ110.45cm	2
9	1 SD 18	土師	環		12.0	8.0	3.2	口縁1/4	横ナテ	横ナテ	横ナテ				暗褐色	密	良		外方にひらぐ	1
10	1 SX 55a	黒色	環		6.0			底面1/8	横ナテ						明褐色	密	良			1
11	1 SK 01	IV	甕		31.6			口縁1/2	横ナテ	ナテ	ナテ				明褐色	やや密	良		口縁部欠損	2
12	1 SK 01	IV	甕		24.0			口縁1/2	横ナテ	横毛	ナテ				外: 暗褐色 内: 暗褐色	やや密	やや良		三角凸部	1
13	1 SK 01	IV	甕		6.4			底面1/8	ナテ	ナテ	ナテ				褐色	やや密	やや良		胴部最大径30.0cm	3

Tab.4 常用ニラバ遺跡出土遺物観察表

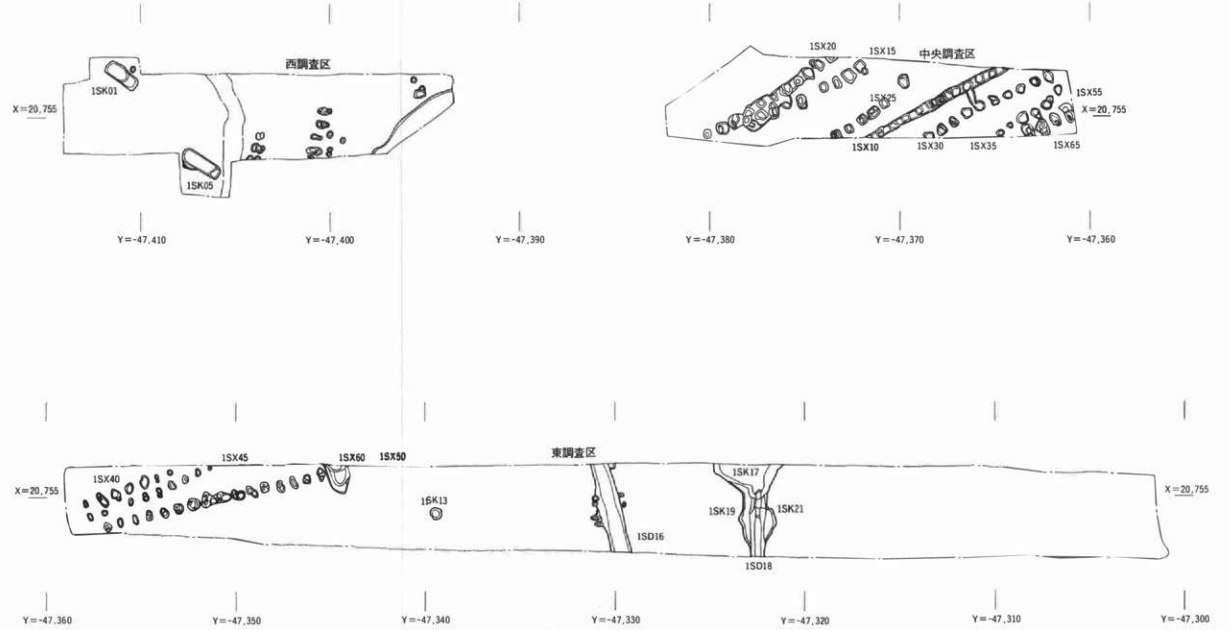


Fig.17 常用ニラバ遺跡第1次調査 全体図 (1/200)

## 2. 常用相割遺跡 (第1次調査)

## (1)はじめに

今回の調査では、水路部分のうち遺構の確認された極一部を調査した。調査区全体のおおよその大きさは、東西方向の部分が幅3m延長92mであった。常用野々下遺跡のすぐ西隣にあたる。現地での調査は平成9年10月1日から10月21日までおこなった。調査は隣接する常用野々下遺跡と平行する形で進め、着手と完了は同時であった。なお、調査全体でも出土遺物は皆無であった。したがって、遺構の時期についての資料は無い。調査は永見秀徳が担当したが、奥村太郎の協力を得た。

## (2)遺構

溝2条ほかを確認した。以下、遺構ごとに報告する。

## 1SD201 (Fig19, Pla.11)

調査区の中央附近を南北に縦断する。幅約5m深さ0.25mを測り、断面は2段掘りによって、東西両側にテラスを形成している。テラスまでの深さは0.1mを測る。出土遺物はない。

## 1SD202 (Fig.19, Pla11)

調査区の東よりに位置し、やや蛇行しながら南北に縦断する。幅1.7m深さ0.4mを測り、断面形状は崩れた逆台形を呈する。出土遺物はない。

## (3)小結

今回の調査では、遺物が全く出土しなかったため、遺構の時期は全く不明である。遺構の性格についても、詳細に論及するだけの資料に恵まれなかった。ただ、1SD202に切られるかたちで、さらに蛇行した溝が検出されている。このことから、1SD202は自然流路を整備した水路の可能性が高いと考えている。

いずれにしても、得られた資料には限りがあり、現時点で本遺跡を評価することは困難である。



Fig.18 常用相割遺跡 (第1次調査) 位置図 (1/2,500)

常用相割遺跡 (第1次調査)

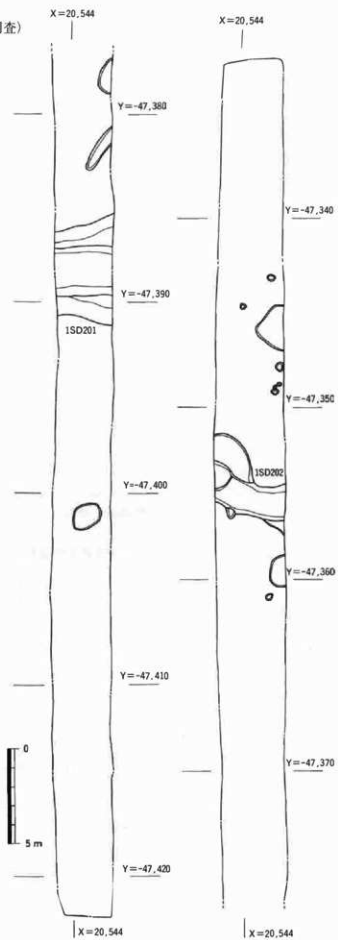


Fig.19 常用相割遺跡遺構全体図 (1/200)

## 3. 常用野々下遺跡（第1次調査）

## (1)はじめに

今回の調査では、水路部分のうち遺構の確認された極一部を調査した。先に報告した常用相割遺跡のすぐ東隣にあたる。調査区全体のおおよその大きさは、東西方向の部分が幅3m延長22mであった。現地での調査は平成9年10月1日から10月21日までおこなった。調査は永見秀徳が担当したが、奥村太郎の協力を得た。



Fig.20 常用野々下遺跡（第1次調査）調査区位置図（1/2,500）

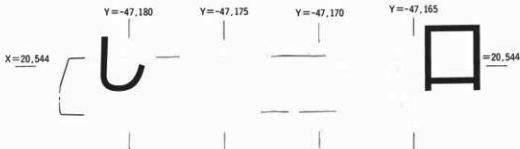


Fig.21 常用野々下遺跡（第1次調査）全体図（1/200）

## 常用野々下遺跡（第1次調査）

### (2)遺構

溝2条はかを確認した。現地での調査は、常用相割遺跡と同時進行の形をとったため、当遺跡での遺構の仮番号はS-101以降を使用した。整理段階で確定する遺構番号も、仮番号を活かすことを基本としているため、101番以降となっている。以下、遺構別に報告する。

#### 1SD101 (Fig.21, Pla.13)

調査区の東端近くに位置する。幅0.9m深さ0.3mを測り、2段掘りをしている。東西両側にテラスが形成され、底面よりも0.15m高くなっている。主軸の方位はN-05°-Wである。出土遺物はない。

#### 1SD105 (Fig.21, Pla.13)

調査区の西端近くに位置し、幅0.3m深さ0.05mを測る。断面はU字状で、主軸の方位はN-23°-Wである。出土遺物はない。

### (3)小結

今回の調査では、遺物が全く出土しなかったため、遺構の時期は全く不明である。遺構の性格についても、詳細に論及するだけの資料に恵まれなかった。そのため、現時点で本遺跡を評価することは困難である。

## 4. 志野添遺跡（第1次調査）

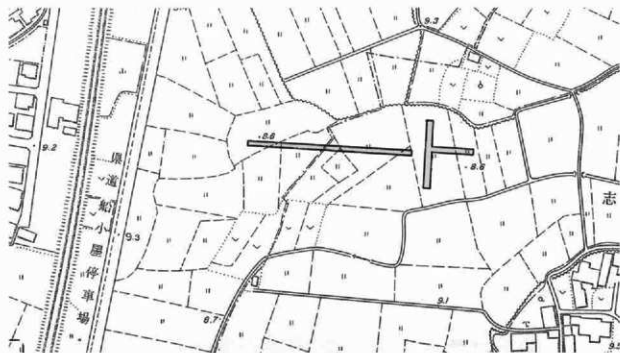


Fig.22 常用野添遺跡（第1次調査）調査区位置図（1/2,500）

## (1)はじめに

今回の調査では、水路部分のみの調査となったことから、当然の制約として非常に細長い調査区を設定せざるを得なかった。また現況の水路・道路の形状から、おおよそ十字型の調査区の設定となった。さらに通路の確保の必要性から西調査区は独立して設定せざるを得ない状況であった。

本報告では、十字形の形状に従い、東調査区・北調査区・南調査区・西調査区とする。調査区全体のおおよその大きさは、東西方向の部分が幅3m延長130m、南北方向が幅3m延長45mであった。そのため、今回の調査では、遺跡の全体像について論及するには到らないことを、はじめにお断りしたい。現地での調査は平成9年11月30日から12月25日までおこなった。少人数の作業員の投入しかできず、進行が危惧されたが、作業員各位の奮闘により、無事調査を完了した。調査は水見秀徳が担当し、奥村太郎の協力を得た。

## (2)遺構

落し穴1基・土坑1基・溝10条を確認した。以下、遺構ごとに報告する。

## 落し穴

## 1SK05 (Fig.24, Pla.17・18)

西調査区の中央附近に位置する。長軸1.5m短軸0.6m残存深さ0.8mを測る。主軸の方位はN-52°-Wである。底面形状は平坦で、底面に径0.1m深さ0.1mの小ビットが6個整然と並んでいる。遺構の形状から、狩猟施設の落し穴と考えてよかよう。

土層の堆積状況は、断面がレンズ状を呈していて、廃絶後に自然埋没したものと理解される。使用時における掘り直し等は確認できなかった。出土遺物はなかった。



志野添遺跡 (第1次調査)

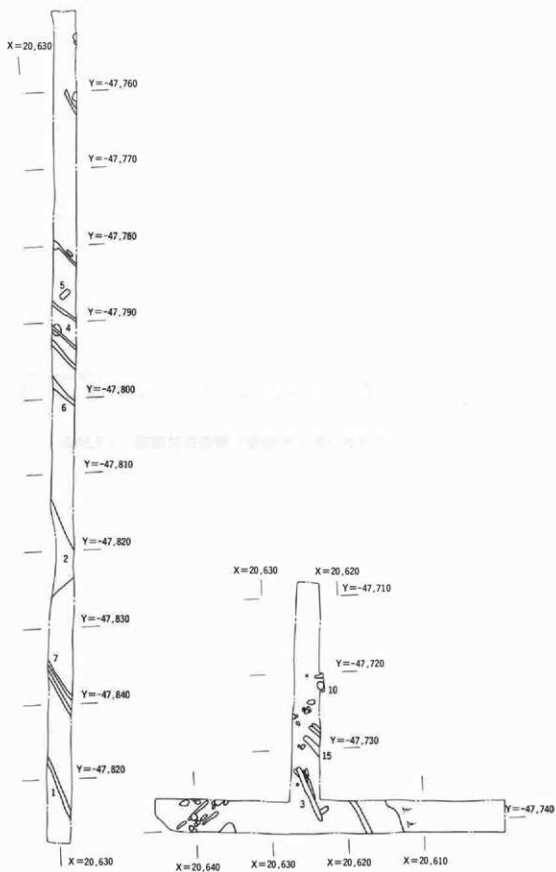
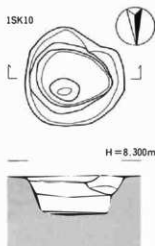
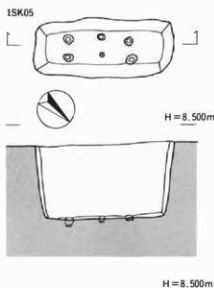


Fig.23 常用野添遺跡 (第1次調査) 略図 (1/500)

土坑  
1SK01

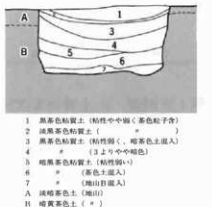
(Fig.24, Pla.19・20)  
東調査区の中央附近に位置する。南半分が調査区外となったため、調査区を拡張して完掘した。平面形態は、やや崩れた円形を呈し、径約1m、残存深さ0.4mを測る。中段に地山削り出しのテラスを有し、底面には径0.2m深さ0.15mの窪みがある。



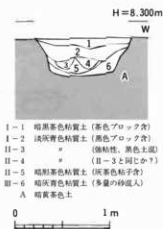
溝

1SD01

(Fig.27, Pla.16)  
西調査区の西端に位置し調査区を斜めに横断する。幅約0.5m深さ0.1mを測り、断面はU字状を呈する。主軸の方位はN-44°-Eである。出土遺物はない。



- 1 暗褐色粘質土 (粘性やや弱く、褐色粘子骨)
- 2 淡黒褐色粘質土 ( )
- 3 黒褐色粘質土 (粘性弱く、暗褐色土混入)
- 4 \* (3よりやや暗色)
- 5 暗黒褐色粘質土 (粘性強い)
- 6 \* (褐色土混入)
- 7 \* (地山混入)
- A 淡褐色土 (地山)
- B 暗褐色土 ( )



- 1-1 暗褐色粘質土 (褐色フロック骨)
- 1-2 淡灰青色粘質土 (褐色フロック骨)
- II-3 \* (粘性、黄色土混)
- II-4 \* (II-3と同じか?)
- II-5 暗褐色粘質土 (灰褐色粘子骨)
- II-6 暗灰青色粘質土 (多量の砂混入)
- A 暗褐色土

1SD02 (Fig.27)

西調査区の西寄りに位置するクレーク跡である。深さ1.0mを測り、断面は逆台形になると思われる。出土遺物はなかった。

1SD04 (Fig.27)

西調査区の東端に位置し調査区を斜めに横断する。幅約0.5m深さ0.1mを測り、断面はU字状を呈する。主軸の方位はN-44°-Eである。出土遺物はない。

1SD06 (Fig.27)

西調査区の東端に位置し調査区を斜めに横断する。幅約0.7m深さ0.1mを測り、断面はU字状を呈する。主軸の方位はN-45°-Eである。出土遺物は磁器・陶器緑泥片岩がある。

1SD07 (Fig.27)

西調査区の東端に位置し調査区を斜めに横断する。幅約0.5m深さ0.1mを測り、断面はU字状を呈する。主軸の方位はN-59°-Eである。出土遺物は陶器がある。

1SD15 (Fig.25)

東調査区の西よりに位置する。幅1.6m深さ0.25mを測り、南側はさらに0.1m深くなる。主軸の方位はN-57°-Eである。出土遺物はない。



- 1 暗褐色粘質土 (粘性強)
- 2 \* (褐色フロック骨)
- 3 \* (粘性強)
- 4 \* (褐色粘子、褐色粘子骨)
- 5 \* (地山フロック骨)
- 6 暗褐色粘質土 (褐色粘子骨)
- A 地山: 暗褐色粘質土

Fig.25 1SD15  
土層断面図 (1/40)

(3)出土遺物

出土遺物は、今回の全体でパンコンテナー1箱程であった。以下、出土遺構別

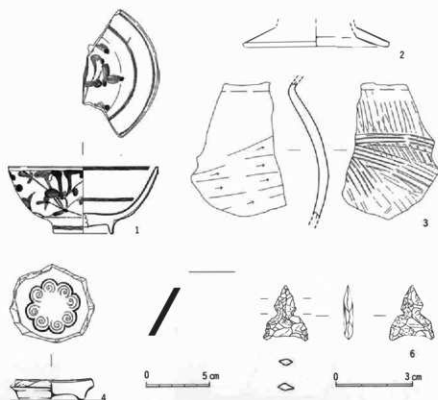


Fig.26 常用野添遺跡 (第1次調査) 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

No	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内部	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部形状	備考	R-No	
1	1 SD 06		染付	碗	11.8	4.7	5.3	1/4	施軸	施軸	施軸	施軸	露胎	素地:明灰白色 釉薬:明灰青色	密	良好	外方にひらく	内外面ともに施文	1	
2	1 SD 15 I	I	土師	脚部			11.6	底部1/6					横ナデ	明茶褐色	密	良		器種不明	1	
3	1 SD 15 II	II	土師	壺				体部細片	刷毛	削り				外:明茶褐色 内:明褐色	やや密	良			1	
4	包含層		青磁	碗	5.4			底部のみ					施軸 輪花文	素地:灰茶灰色 釉薬:暗黒緑色	密	良好		電泉窯系 厚めに施軸	1	
5	包含層		青磁	碗				口縁細片	施軸	施軸	施軸			素地:灰茶灰色 釉薬:暗青緑色	密	良好	わずかに内洗	電泉窯系 貫入がみられる	2	
6	表探		黒曜石	石鏃				完形											扱りが2ヶ所 0.7g	1

Tab.5 常用野添遺跡 (第1次調査) 出土遺物観察表

S-番号	層	遺構番号	層	発生土層	土師器	須恵器	陶器	磁器	石器	その他	備考
1		1 SD 01									遺物なし
2		1 SD 02									クレーク跡・遺物なし
3		1 SD 03		片	片						
4		1 SD 04									碗(瓦器か?)
5		1 SK 05									遺物なし
6		1 SD 06						皿片	染付碗・片	緑泥片岩・石	
7		1 SD 07						片			
15	I	1 SD 15	I	片	壺(脚台?)・片						
15	II	1 SD 15	II	壺							
包含層	包含層			高坏片	漆鉢・片	雙片・片	鉢	染付片・龍泉系青磁碗	黒曜石割片		
表探	表探				皿片・土師片・片		片	染付片・龍泉碗片	黒曜石石鏃・黒曜石割片	瓦片	

Tab.6 出土遺物一覧

に報告する。

溝出土遺物

1SD06出土遺物 (Fig.26, Pla.20)

染付碗を報告する。1は染付の碗で、畳付から内底見込が露胎であるほかは、全面に透明釉がかかる。

志野添遺跡 (第1次調査)

体部外面と内底見込に施文する。

1SD15出土遺物 (Fig.26, Pla.20)

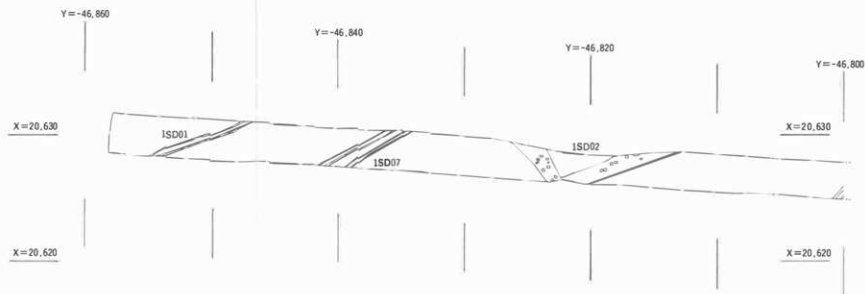
土師器の頸部と腰を報告する。2はI層から出土した脚部である。全体の器形等は不明である。3はII層から出土した腰の体部で、体部内面に横方向の寛削りが認められる。外面には明瞭な刷毛目を認めることができる。

包含層出土遺物 (Fig.26, Pla.20)

青磁碗を報告する。4は竜泉窯系の青磁碗の底部のみが残存し、体部は打ち欠いていると思われる。内底見込には輪花文が施されている。畳付と高台見込は露胎である。5は青磁碗の口縁から体部である。

表面採集遺物 (Fig.26, Pla.20)

石鏃を報告する。6は黒曜石の石鏃である。石材は腰岳産のものではないか。不明瞭ながら、2ヶ所の挟りが認められ、アメリカ型に似る。



(4)小結

今回の調査は、面的な調査ではないため、遺跡の構造や掘り等には論及できないが、落とし穴と溝状遺構について若干の考察を加えてみたい。落とし穴遺構は鶴田岸添遺跡第2次調査(註1)や久志内次郎遺跡第2次調査(註2)で一定基数が確認されているが、今回の調査では1基確認したにとどまった。当然周辺にも分布していると考えられるが、今回の調査成果からは、その配列や狩の方法の復元を語ることはできない。

さて、単独での確認となった落とし穴であるが、先に紹介した2遺跡で調査した事例とは平面プランが異なっている。鶴田岸添遺跡等で確認された落とし穴は、おおむね1m×0.8mの隅丸方形が多い。それに対し、今回確認したものは、長軸1.5m短軸0.6mと非常に細長い平面形状が特徴的である。また、深さは残存深さ0.8mを測り、底面には逆茂木の痕跡と思われる小穴が6個確認できる。形状から、用途は狩猟用の罠と考えるとよい。1基のみの検出であるため、獣道に対して縦横に配置したのか横位に配置したのかは定かではない。いずれにせよ、幅の広い落とし穴とは、狩猟対象動物が異なっている可能性がある。民俗例を含めた論考が必要であろう。

また、この落とし穴を設置した集団の居住する集落についてであるが、当遺跡の北約500mには、縄文時代から弥生時代かけての集落遺跡である裏山遺跡が知られている。ひとつの可能性が論じられよう。

註1 筑後市文化財調査報告書第12集「筑後東部地区遺跡郡Ⅱ」筑後市教育委員会1995

註2 筑後市文化財調査報告書第35集「筑後東部地区遺跡郡Ⅴ」筑後市教育委員会2001



## 5. 志上婦計遺跡 (第1次調査)

## (1)はじめに

この調査も、水路予定地内の遺跡について記録保存の措置を講ずるために実施したものである。当初は東西方向の支線水路の予定地内のみを調査の対象としていた。しかし、調査期間中に調査区の東端附近から南に延びる水路の工事が追加され、協議の結果、調査範囲を拡大して記録保存の措置を講ずることとなった。最終的な調査面積は265m<sup>2</sup>であった。

現地での調査は平成9年9月30日から12月25日までおこなった。調査期間中に数度大雨に見舞われたが、その度に調査区は大量の雨水により水没した。大型のポンプも動員して排水にあたり、やっと思いで調査完了にこぎ着けた感がある。特に、足場の悪中、懸命に排水作業を行っていただいた作業員各位には頭の下がる思いである。その奮闘があってこそこの調査完了であったといえる。

調査は永見秀徳が担当したが、奥村太郎の協力を得た。



Fig.28 志上婦計遺跡 (第1次調査) 調査区位置図 (1/2,500)

## (2)遺構

溝3条を確認した。以下、遺構ごとに報告する。

## 1SD01 (Fig.29, Pla.22)

調査区の東端附近に位置する。幅約3.1m深さ0.5mを測り、断面は緩やかなU字状を呈する。主軸の方位はN-26°-Eである。西岸の斜面には、多数の小土坑やピットが集中して見られる部分がある。それに対して東岸は、ピット1つと張り出しが1ヶ所確認できるが、西側のように集中して分布するような状況は見受けられない。出土遺物は須恵器・土師器等がある。

## 1SD02 (Fig.32)

調査区の東端に位置し、調査区を南北に縦断する。幅1.6m深さ0.25mを測り、南側はさらに0.1m深くなる。出土遺物はない。

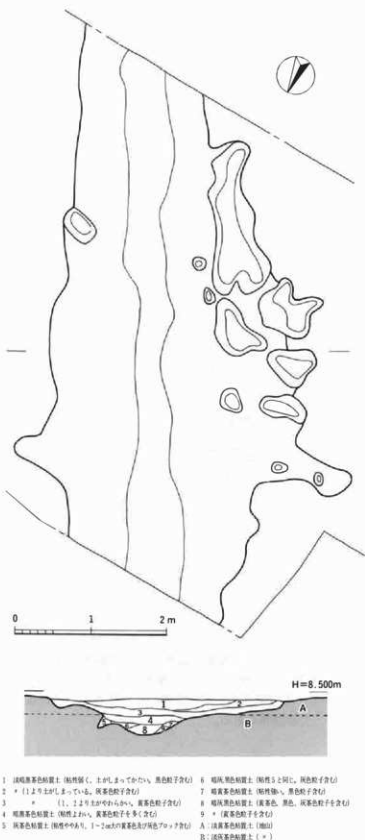


Fig.29 1SD01実測図 (1/40)

### (3)出土遺物

弥生土器・須恵器・土師器・陶器・磁器・石材等が出土した。以下、主要なものを遺構種類別に報告したい。

#### 溝状遺構

##### 1SD01 (Fig.30-1, Pla.23)

須恵器・土師器を報告する。すべてI層からの出土である。1~3は須恵器である。1は蓋である。宝珠つまみを有する坏蓋で、端部は明瞭な面をなす。体部上面は回転磨削りの痕跡が明瞭である。荒尾の小袋山のものか? 2は高坏の脚部である。残存部はすべて横ナデ調整によっている。大きく歪んでいるため、底径の数値は確定できない。3は壺である。肩の上部に3条の沈線を施しているようである。体部下半には掻き目が施されている。

4~10は土師器である。4は甕の口縁で、内面には磨削り痕が明瞭である。5は高坏の坏部である。体部に段を有し、そこで体部の傾きが変わる類型である。段の部分での粘土接合面が明瞭で、その部位での剥離も認められる。6~8は坏で、3点とも丸底のものであろう。6は全体の3/4が残存し、全体が知れる唯一の資料である。体部外面は手持ち磨削りがほどこされ、口縁部附近は横ナデ調整である。9・10は碗である。9はボウル型の器形のもので、内面には磨きの痕跡が残る。10は直線的な体部をもち、坏かも知れない。

#### 表土出土遺物 (Fig30-2, Pla.23)

11は土師器の土錘である。完形で、重量は0.8gである。

#### (4)小結

今回の調査では、際立った遺構や遺物の出土はそれほど多くない。その中で、ここでは1SD01とその出土

志上婦計遺跡 (第1次調査)

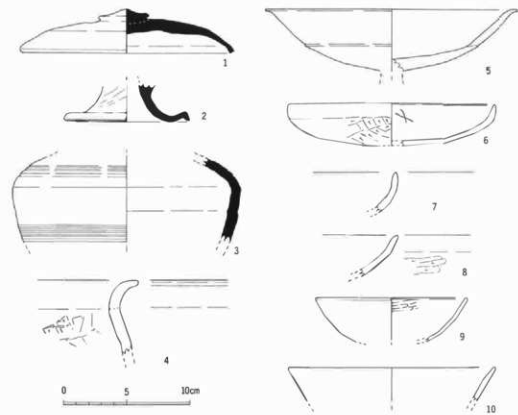


Fig.30-1 1SD01出土遺物実測図 (1/3)

No.	遺物番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内部	口縁部	内底面	外面	色	装	土質	形状	口縁部	備考	尺
1	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	外・黒茶灰色 内・淡褐色	無	良好	明瞭な面を とらえる	つまみ径も10cm 小須恵器か?	1	
2	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	外・黒茶灰色 内・黒茶灰色	無	良好	大きく原じ		2	
3	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	外・黒茶灰色 内・黒茶灰色	無	良好	肩の上に沈線3条あり		3	
4	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	明白色	無	良好	外反		4	
5	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	外・淡白褐色 内・淡白褐色	無	良好	外反	杯部は体部の中間で 途がつか	10	
6	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	淡褐色	無	良好	わずかに 内湾	口縁部直下の内側に 沈線文あり	5	
7	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	淡褐色	無	良好	わずかに 内湾		9	
8	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	明白色	無	良好	わずかに 外反		8	
9	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	明白色	無	良好	外方に ひらく	口縁部直下の内側に 沈線文あり	6	
10	1 SD 01	1	100	17.0	3.5	2/3	調子	調子	調子	調子	調子	調子	調子	外・黒茶灰色 内・黒茶灰色	無	良好	外方に ひらく		7	
11	表土	土層	土層	0.7	1.0	定形								淡乳白色	無	良好		0.8g	1	

Tab.7 志上婦計遺跡 (第1次調査) 出土遺物観察表

遺物について若干触れておきたい。

ISD01は今回調査したなかで、唯一古代まで遡ることができる遺構となった。筑後市内には、古代官道の西海道が縦断しているが、その主軸はおおよそN-05°-Eである。しかしISD01の主軸は、大きく異なっており、性格がわからない。

出土遺物のうち、須恵器の坏蓋は口縁端部に明瞭な面を持ち、当地での一般的な器形とは異なっている。搬入品の可能性も考える必要があろう。



Fig.30-2 表土出土遺物実測図 (1/3)

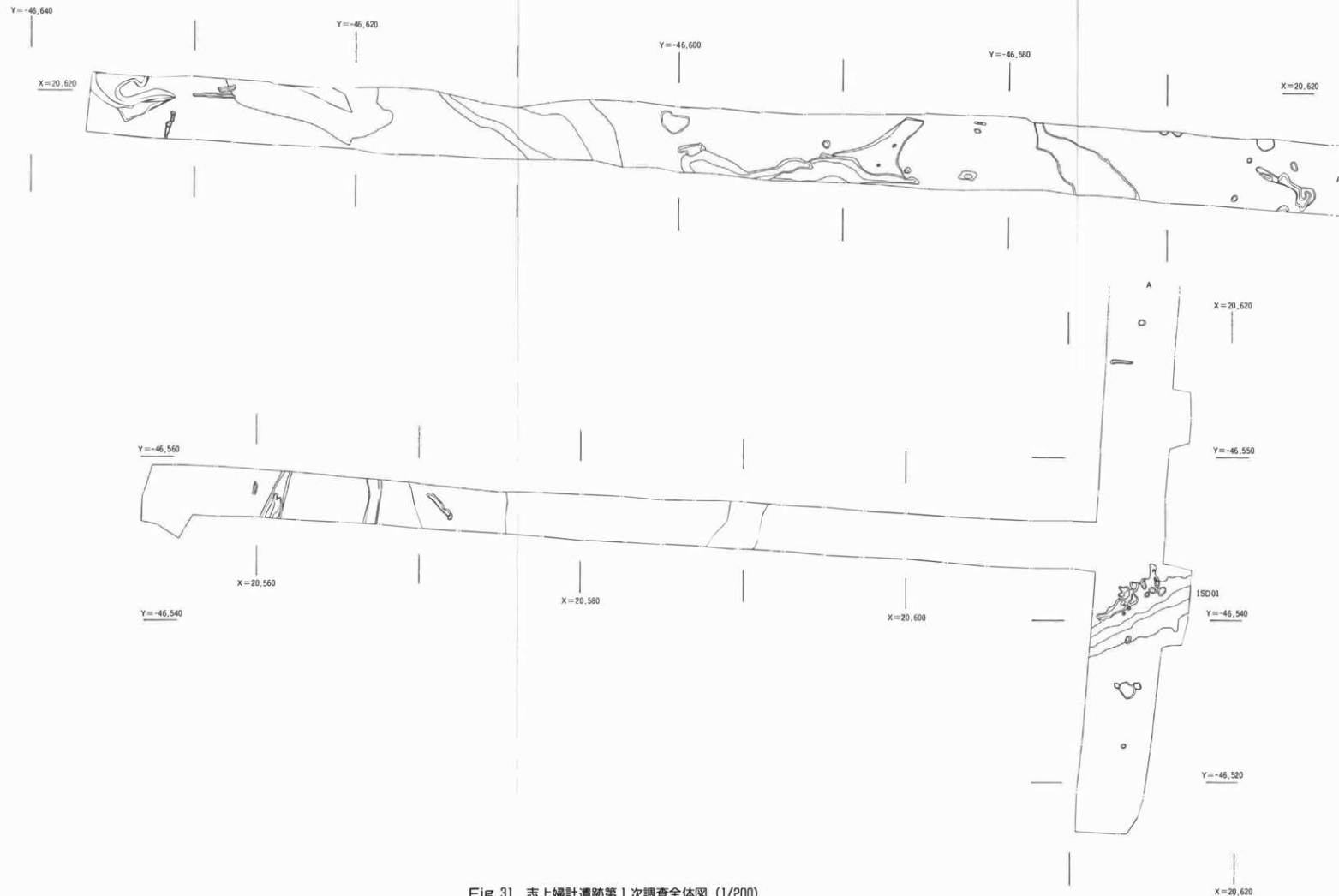


Fig.31 志上婦計遺跡第1次調査全体図 (1/200)

## 6. 志上婦計遺跡（第2次調査）

## (1)はじめに

志上婦計遺跡（第1次調査）の東側に連続する調査区である。道路を挟んで調査区が独立し、かつ2つの調査の間に他の遺跡の調査を実施する必要があったため、東側の調査は第2次調査として別に実施した。現地での調査は平成10年2月6日から平成10年2月28日までおこなった。調査は永見秀徳が担当したが、末吉隆弥（現：川崎町教育委員会）の協力を得た。

## (2)遺構

溝・土坑・小穴を確認した。以下、遺構ごとに報告する。

## 溝状遺構

## 1SD01 (Fig.34, Pla.25)

調査区の西端に位置する。幅約0.6m深さ0.3mを測り、断面はU字状を呈する。主軸の方位はN-53°-Eである。出土遺物は、土師器（土鍋・片）・黒曜石（剥片）がある。

## 1SD04 (Fig.34, Pla.26)

東西調査区の中央附近に位置する。幅約0.3m深さ0.1mを測り、断面は逆台形を呈する。主軸の方位はN-04°-Wである。出土遺物は、黒曜石（剥片）がある。

## 1SD15 (Fig.34)

東西調査区の西寄りに位置する。幅約0.3m深さ0.1mを測り、断面は逆台形を呈する。途中で大きく屈曲する。出土遺物は、黒曜石（剥片）がある。

## 土坑

## 2SK05 (Fig.35)

調査区の西端にあり、1SD01に切られている。長軸1.1m短軸1.0m深さ0.2mを測る。主軸の方位はN-28°-Wである。出土遺物は土師器（土鍋・片）がある。



Fig.32 志上婦計遺跡（第1次調査）調査区位置図（1/2,500）





南北調査区地山裁割状況



東西調査区地山裁割状況

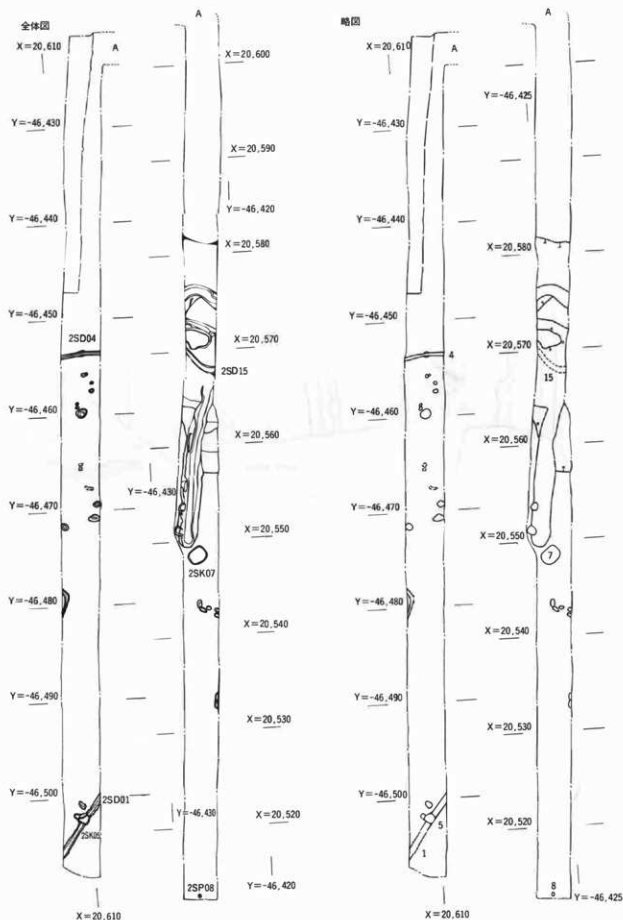


Fig.34 志上婦計遺跡第2次調査略測図・全体図 (1/400)

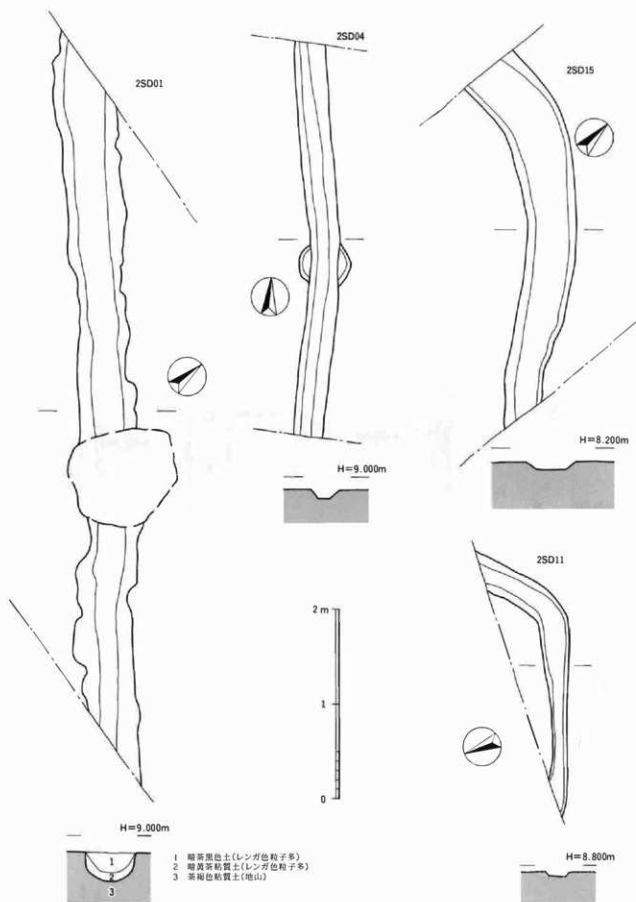


Fig.34 溝状遺構実測図 (1/40)

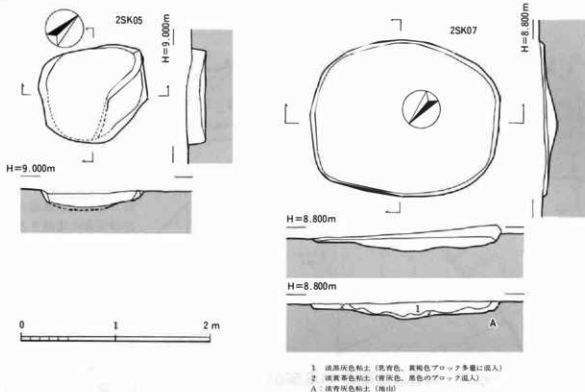


Fig.35 土坑実測図 (1/40)

## 2SK07 (Fig.35)

南北調査区の中央附近にあり、長軸2.0m 短軸1.6m 深さ0.2mを測る。主軸の方位はN-50°-Eである。出土遺物は土師器(坏)がある。

## 小穴

## 2SP08 (Fig.34)

調査区の南にあり、径0.4m深さ0.2mである。出土遺物は須恵器(鉢)がある。

## (3)出土遺物

## 1SD01出土遺物 (Fig.36, Pla27)

1は土師器の土鍋である。

## 1SP07出土遺物 (Fig.36, Pla27)

2は須恵器の鉢である。片口鉢であろう。



Fig.36 志上婦計遺跡第2次調査出土遺物実測図 (1/3)

## (4)小結

L字型の細長い調査区の設定であったため、遺跡の拡がり等はうまく掴めなかった。しかし、周辺の調査結果を総合すると、時期により変遷はあるものの、東西方向の流路を整備しながら生活の基盤を築いた、先人の暮らしぶりを垣間見ることができる。しかしながら、第1次調査で確認した流路との整合性も充分でなく、さらなる検討が必要であろう。まさに、資料の集積が求められるところである。

No	遺跡番号	層位	種類	器種	口径 (cm)	長径 (cm)	容積 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内部	内底面	外面	色調	胎土	焼成	口縁部形状	備考	R-No
1	2 SD 01		土師	土鍋				口縁部断片	不明					灰茶白色	やや密	良	内溝	土師or類?	1
2	2 SP 08		須恵	鉢				口縁部断片	横十字	横十字	横十字			明青灰色	密	良好	外方にひらく	口付き	1

Tab.8 志上婦計遺跡第2次調査出土遺物観察表



## 8. 志八反田遺跡 (第1次調査)

## (1) はじめに

志上婦計遺跡の調査中に、ほ場整備地区の北端に水路を増設する計画変更の申し入れがあった。緊急に試掘調査を実施したところ、遺構が確認されたため、当該部分のみ記録保存の措置をとることとした。現地での調査は平成10年2月6日(1日間)におこなった。調査は永見秀徳が担当したが、基準点測量等で上村英士の協力を得た。

## (2) 遺構

溝1条と土坑を確認した。以下、遺構ごとに報告する。土坑は調査区西側の溝状遺構の両側にあるものと、調査区の東端近くに密集する集団とにわけることができる。

## 1SD01 (Fig.40)

調査区の西端附近に位置する。幅約0.4m深さ0.2mを測り、断面はU字状を呈する。主軸の方位はN-03°-Wである。出土遺物は弥生土器がある。

## 1SK02 (Fig.40)

調査区の西端に位置し、1SD01の西に隣接する。深さ0.15mを測るが半分程が調査区外となるため平面規模は不明である。出土遺物は認められなかった。

## 1SK03 (Fig.40)

調査区の西端に位置し、1SD01の東に隣接する。長軸0.5m短軸0.3m深さ0.1mを測る。出土遺物は認められなかった。

## 1SK04 (Fig.40)

調査区の東端の土坑群のうち西端に位置する。平面形状は一辺0.5mの略方形を呈し、深さ0.3mを測る。出土遺物は認められなかった。

## 1SK05 (Fig.40)

調査区の東端の土坑群のうち西寄りに位置する。平面形状は一辺0.4mの隅丸方形を呈し、深さ0.2mを測る。出土遺物は認められなかった。



Fig.39 調査区位置図 (1/2,500)

志八反田遺跡 (第1次調査)

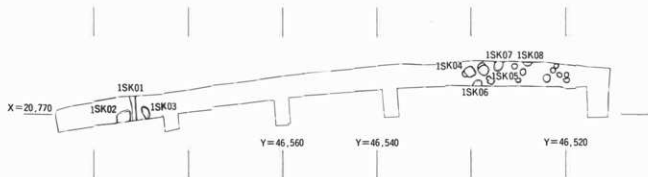


Fig.40 遺構全体配置図 (1/400)

1SK06 (Fig.40)

調査区の東端の土坑群のうち西寄りに位置する。半分程が調査区外となるため平面規模は不明であるが、深さ0.2mを測る。出土遺物は認められなかった。

1SK07 (Fig.40)

調査区の東端の土坑群のうち西寄りに位置する。一部が調査区外となるため平面規模は不明であるが、深さ0.4mを測る。出土遺物は認められなかった。

1SK08 (Fig.40)

調査区の東端の土坑群のうち東寄りに位置する。平面形状は径0.3mの円形を呈し、深さ0.1mを測る。出土遺物は認められなかった。

1SK08 (Fig.40)

調査区の東端の土坑群のうち中央附近に位置する。半分程が調査区外となるため平面規模は不明であるが、深さ0.2mを測る。出土遺物は認められなかった。

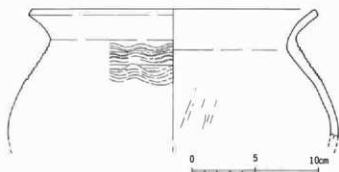


Fig.41 1SD01出土遺物実測図 (1/3)

(3) 出土遺物

遺物を出した遺構は1SD01のみである。

1SD01出土遺物 (Fig.41)

1は弥生土器の甕である。頸部に沈線にて波状文を施している。土師器とすべきかもしれない。

(4) 小結

調査区の東端で土坑群を確認したものの、出土遺物が皆無で時期の比定ができない。集落内の土坑というよりも耕作地周辺での土坑と考えた方が良いかも知れない。周辺への展開が気になる所であり、時期の比定も課題である。

西端の溝状遺構は、周辺の調査事例との擦り合わせが肝心かと思われるが、資料不足の感が強い。しかし、大規模流路が東西方向に走るのに対して、南北方向の溝状遺構はその性格を考える上でも興味深い。用途と時期が判明すれば、当地域の土地利用の在り方等を復元する材料となり得るだろう。

No	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部形状	備考	R-N
1	1SD01	弥生	甕	18.0				口縁部1/6	横ナテ	刷毛	刷毛			明茶褐色	砂較多	1121良	「く」の字状		1

Tab.9 志八反田遺跡出土遺物観察表

## 9. 志西田遺跡 (第1次調査) の調査

## (1) はじめに (Fig.39)

当遺跡は筑後市大字志西田に所在し、標高8.2m位の低位段丘上にある。発掘調査は平成9年度県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区に伴い、水路工事予定箇所である約300m<sup>2</sup>を実施した。調査期間は平成10年3月2日から同年3月31日までこの間重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、調査は小林勇作が担当した。調査の結果、溝や落とし穴状遺構等を検出した。

## (2) 検出遺構

## 溝

## 1SD15 (Fig.45)

調査区の東端部で検出した南北溝で約3.5m分を確認した。溝の幅は1.05~1.35m、遺構面からの深さは約0.26mを測り、溝の東岸から東方へは地形が落ち込んでいるのを確認した。断面形はほぼ逆台形状を呈し、堆積土は暗黒色土を基調とする。遺物は石器(搔器)が出土している。

## 1SD20 (Fig.45)

調査区の南部で1SX05を切るように検出した南北溝である。上幅約2.95m、下幅約0.75m、遺構検出面からの深さは約0.80mを測り、溝の断面形はほぼU字状を呈する。溝内の中心部には別の溝状の掘り込み(堆積土は暗灰色土)が確認され、ほ場整備直前まで使用されていた現代の溝が共有していた可能性が考えられる。溝底の西岸では径10cm程度を測る14本の杭が溝軸にほぼ沿うように垂直に穿たれていたが、埋土の状況からは近世の所産と考えられる。出土遺物は縄文土器(片)、須恵器(蓋・甕)、土師器(火鉢・土鐘)、青磁(椀)、染付(椀)、陶器(片)、石器(黒曜石片)、金属製品(鉄釘・一銭)が認められており、中世以降から現代まで使用され続けてきた溝と考えられる。

## 落とし穴状遺構

## 1SX05 (Fig.45, Pla.32)

調査区の南部で確認した。平面プランが楕円形ないしは長方形を呈する遺構で、遺構の西部上位は1SD20に切られている。長軸1.42m以上、短軸0.99m以上、遺構検出面からの深さ0.70mを測り、遺構底部の中央部には径0.31m程度のビット1穴を確認している。ビットの深さは遺構底面から0.38mを測る。堆積土は暗黒色土を基調とし、出土遺物は認められていない。遺構の構造から落とし穴と考えられる。

## 1SX10 (Fig.45, Pla.32)

調査区の南部で確認した。平面プランが楕円形を呈する遺構で、長軸1.30m、短軸1.26m、遺構検出面からの深さ0.82mを測る。遺構底部の中央部には径4~9cmのビット6穴を確認しており、ビットの深さは遺構底面から0.20m程度を測る。堆積土は暗黒色土を基調とし、出土遺物は認められていない。遺構の構造から落とし穴である可能性が高い。



Fig.42 志西田遺跡調査地点位置図 (1/2,500)



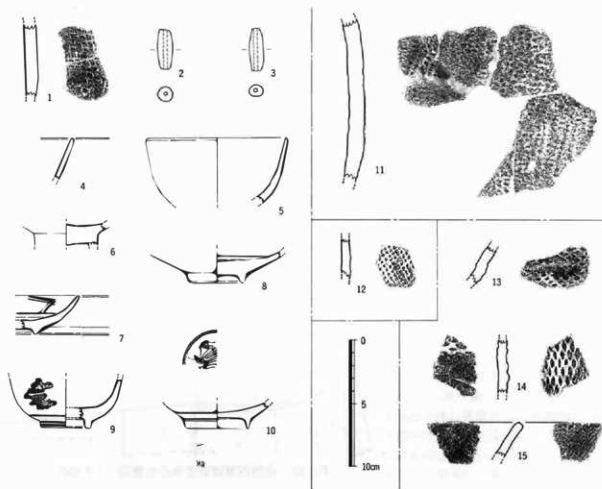


Fig.43 志西田遺跡出土土器実測図（1/3）

(3) 出土遺物

溝

1SD15 (Fig.44, Pla.34)

石器

搔器 (16) 石材は黒曜石製で縦長剥片を素材としている。裏面の左側上位縁には細かいリタッチを加えて刃部を作り出している。

1SD20 (Fig.43, Pla.33)

縄文土器

鉢 (1) 体部の細片で、外面には楕円押型文が施されている。色調は内面が暗茶色、外面が淡赤茶色で、胎土は雲母、石英、角閃石を多く含む。器厚は1cm前後を測る。

土師器

管状土錘 (2・3) 共にほぼ完形品で、2は長さ3.10cm、幅1.20cm、孔径0.30cm、3は長さ3.40cm、幅1.20cm、孔径0.30cmを測る。

青磁

碗 (4~6) 4は口縁部の細片で、素地は芯が淡赤茶色、表面が淡灰色で微砂粒を多く含む。釉調は暗緑色の透明釉を内外面に施し、貫入を認める。5は口径11.20cmを復原する。微砂粒を少量含む乳白色の素地に青緑色の釉を内外面に施す。6は底部の細片で、高台部は欠損している。微砂粒を少量含む淡茶色の素地に青緑色の釉を内面及び高台外面に施釉する。高台内は露地で、見込みには「金玉満堂」の刻印が施されているが、刻印が浅いため図示はしていない。



Fig.44 志西田遺跡出土石器実測図 (1/2)

**染付**

皿 (7・8) 7は乳灰白色の素地に乳白色の軸を畳付け以外に施す。畳付けは露胎で砂が付着している。見込みは蛇ノ目状に軸を掻き取り、体部内面には呉須で文様を描く。8は高台径4.60cmを復元し、黒色粒子を僅かに含んだ乳灰色の素地に乳灰白色の軸を畳付け以外に施軸する。畳付けは露胎で、砂が付着しており、見込みは蛇ノ目状に軸を掻き取っている。

碗 (9・10) 9は高台径4.00cmを復元し、乳灰白色の素地に乳白色の透明軸を畳付け以外に施軸する。畳付けは露胎で砂が付着している。体部外面には呉須で文様が描かれている。10は高台径5.00cmを復元し、黒色粒子を少量含む淡灰色の素地に乳白色の軸を全面に施軸する。見込みにはややくすんだ呉須で文様を描き、高台内には「□明」の銘を呉須で書く。

**ビット**

1SP04 (Fig.43, Pla.33)

**縄文土器**

鉢 (11) 体部の破片で、外面には楕円押型文が施されている。色調は淡黒茶色で、胎土は雲母、石英、角閃石を多く含む。器厚は1.3cm前後を測る。

1SP07 (Fig.40, Pla.33)

**縄文土器**

鉢 (12) 体部の細片で、外面には楕円押型文が施されている。色調は淡赤茶色で、胎土は石英、角閃石を多く含む。器厚は0.7cm前後を測る。

包含層 (Fig.43・44, Pla.33・34)

**縄文土器**

鉢 (13~15) 13は体部の細片で、外面には楕円押型文が施されている。色調は淡黄茶色で、胎土は雲母、石英、角閃石を多く含む。器厚は0.9cm前後を測る。14は体部の細片で、外面及び内面上位には粗大楕円押型文が施されている。色調は淡黄茶色で、胎土は雲母、石英、角閃石を多く含む。器厚は0.9cm前後を測る。15は口縁部の細片で、内外面には山形押型文が施されている。色調は淡黄茶色で、胎土は雲母、石英、角閃石を多く含む。器厚は0.7cm前後を測る。

石器

石鏃（18～20） 18は二等辺三角を呈した黒曜石製の石鏃である。両脚部を欠損しているが切りの深い石鏃であったと考えられ、両面は打面部を完全に除去している。19は正三角を呈した黒曜石製の石鏃である。片脚端部を欠損し、裏面にネガティブ面を僅かに残している。20は正三角を呈した黒曜石製の石鏃で、片脚端部を欠損する。裏面左側はリタッチが加えられておらず、両面には剝離によるネガティブ面を大きく残している。

削器（21） 横長の剥片を素材としたサヌカイト製の削器で、刃部加工は裏面に部分的なリタッチを加えて作り出している。

表土（Fig.44、Pl.34）

石器

石帯（17） 石材は頁岩製と思われる。縦長2.75cm、厚さ0.80cmを測り、横長は4.30cmを復原する。丸柄の石帯で、表面及び側面は平滑に研磨されているが、裏面は未研磨である。裏面には2箇所のかがり穴が穿たれており、3箇所のかがり穴が施されていたものと思われる。

(4) 小結

今回は水路工事設置箇所等の調査であったためトレンチ状の細長い調査区域となったが、縄文時代の落とし穴状遺構や近世の溝などの遺構と縄文土器、土師器、須恵器、磁器、石器、金属製品などの遺物が認められたことは成果であった。今回の成果に加えて、周辺では縄文時代早期の遺物が多く確認されており、当該地区一帯は縄文時代早期を主体とする遺跡が点在していたことが窺えた。

さて、今回の調査を振り返ってみたい。調査区の西側で検出した1SX05・1SX10は縄文時代の遺構と思われる。どれも時期を示唆する遺物は認められていないが、遺構の構造からは落とし穴状遺構の可能性が高く、その形態分類（註1）は1SX05=B類2型、1SX10=C類2型のタイプに相当すると思われる。当遺跡周辺での落とし穴状遺構は今回が初めての検出となるが、市内の中央部や南東部では数例が確認されている（市内の落とし穴状遺構検出状況については「筑後西部地区遺跡群Ⅱ（註2）」において記載しているので参照されたい）。遺構の時期については1SP04・1SP07（非常に浅く、遺構としては捉えにくい窪み状痕跡）から早期の押型土器が、また周辺の包含層からは早期の遺物が大量に出土していることから当該期の所産と想定したいところであるが、検出時の包含層との切り合いが不明であること、遺構からの出土遺物が皆無であることから断定には至っていない。その他、調査区の南西部で検出した南北溝の1SD20があるが、当調査区から南方へ約30m地点の「志西野々遺跡（註3）」では当溝と同等規模の南北溝（SD01）が検出されており、その規模と調査成果からは当溝と同一のものでないかと想定できる。性格としては土地を区割りしていた区画溝のような小水路で、堆積状況からは長い間流水がともなっていたものと考えられる。時期は概ね中世まで遡り、ほ場整備前まで使用されていた現代溝と一部で重複していたことからごく最近までの存続が考えられる。当地においては中世から現代に至るまでの地割りが殆ど変化していない状況であろう。

おわりに、表土採集遺物から石帯（17）1点が認められたことについてふれる。これまで市内遺跡で出土した例は「若葉森坊遺跡（註4）」において巡方石帯が1点出土しているのみであり、今回はそれに継ぐ2例目となる。特殊な遺物であるにもかかわらず、当遺跡周辺での関連遺構は現在のところ確認できていない。今回は偶然にも表土中から採集することができたが、表土採集であるだけに他地域からの持ち込まれた可能性も十分に考えられる。今後の成果に期待する。

【註】

- 1.「安武地区遺跡群Ⅱ」久留米市文化財調査報告書第60集 久留米市教育委員会（1989）
- 2.「筑後西部地区遺跡群Ⅱ」筑後市文化財調査報告書第29集 筑後市教育委員会（2000）
- 3.「筑後西部地区第2地区遺跡群Ⅱ」筑後市文化財調査報告書第27集 筑後市教育委員会（2000）
- 4.「若葉森坊遺跡」は筑後市中央部、現在のサザンクス筑後に位置し、志西田遺跡からは北方へ約2.8kmの地点にあたり、巡方石帯は平成11年度筑後市文化財資料展で展示された。

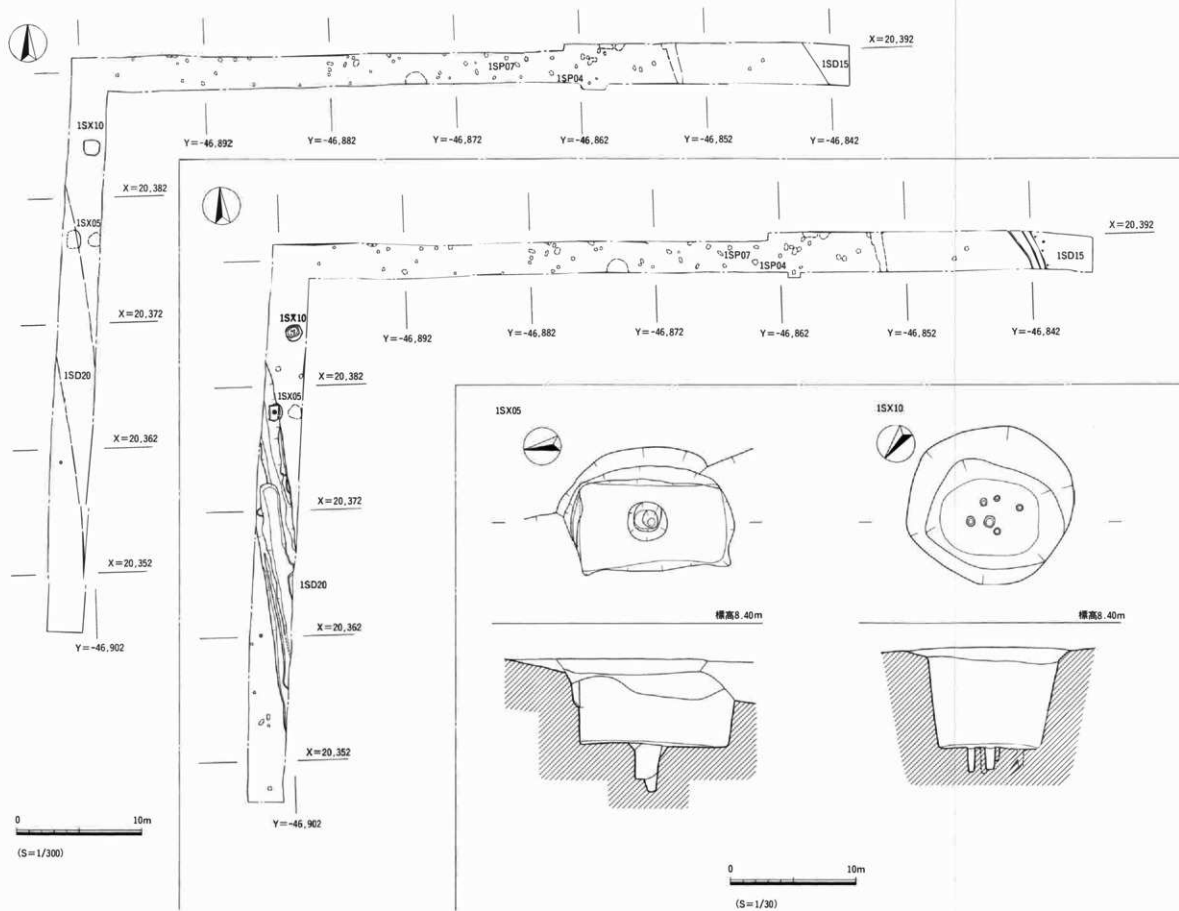


Fig.45 志西田遺跡略測図 (1/300)、遺構全体実測図 (1/300)、落とし穴状遺構実測図 (1/30)

## 9. 尾島下町裏遺跡 (第1次調査)

## (1)はじめに

今回の調査では、水路部分のうち遺構の確認された部分を調査した。調査区の規模は幅3m延長27mであった。当初は、志地区の調査終了後に調査を実施する予定であったが、事業者側の都合で急遽繰り上げて実施した。現地での調査は平成10年1月16日から平成10年1月30日までおこなった。調査は永見秀徳が担当したが、奥村太郎の協力を得た。

## (2)遺構

道路状遺構・溝状遺構・土坑を検出した。以下、遺構の種類別に報告する。

## 道路状遺構

## 1SF05 (Fig.48, Pla.25)

調査区の西端にあり、ISD01の上層遺構となる。両側に細い側溝を持ち、路盤の中央付近で硬化面が僅かに認められる。路盤の幅員は約3mである。両側の側溝は、幅0.4m深さ0.1mで、道路の主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ である。先述したようにISD01の上層遺構となるため、その部分の路盤は沈下した痕跡が



Fig.46 尾島下町裏遺跡 (第1次調査) 調査区位置図 (1/2,500)

尾島下町裏遺跡 (第1次調査)

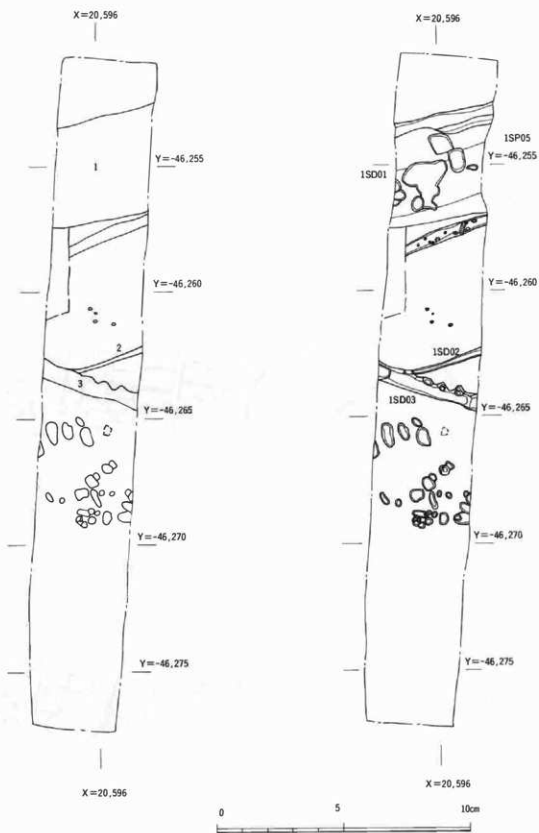


Fig.47 尾島下町裏遺跡第1次調査 略図・全体図 (1/150)

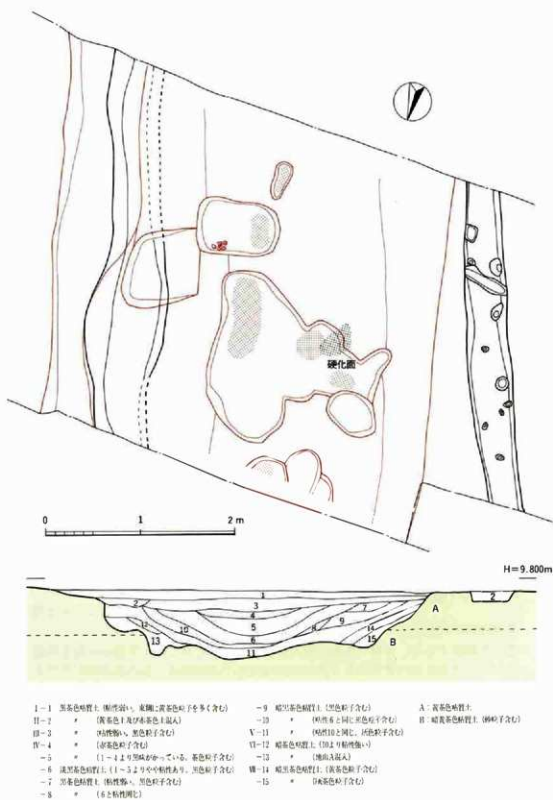


Fig.48 1SD01・1SF05実測図 (1/40)

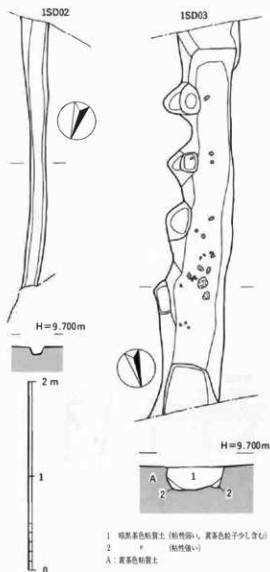


Fig.49 1SD02・1SD03実測図 (1/40)

器(片)・緑泥片岩がある。

出土した遺物を観察すると、Ⅲ層とⅣ層の間で時期差が見いだせない。Ⅴ層からも土師皿が出土しているが、小片のため時期比定の資料になり得ない。埋没完了の時期は中世の後半期として大過なかならうが、確証を欠くため判断としない。

#### 1SD03 (Fig.49, Pla37)

調査区の中央附近にあり、2SD02を切っ幅0.6m深さ0.2mで、東縁には径0.4m程の小土坑が連続して穿たれている。出土遺物は土師器(片)がある。

#### 土坑群 (Pla37・38)

調査区の中央附近から西寄りにかけて、土坑群が検出された。不整形な土坑が密集するが、連続土坑になるかも知れない。残存する深さは、いずれも約0.1mほどである。出土遺物は皆無であった。

#### (3)出土遺物

出土遺物は全体に少量であって、一定量の出土を見込んだ1SD01も同様の傾向であった。以下、遺構別に報告する。なお、遺物個々の報告は遺物観察表を主体としているため、詳細についてはそちらを参

認められる。土層図を観察すると、Ⅱ層が1SF05の道路側溝の埋土にあたるのであるが、その上のⅠ層は、側溝が完全埋土した後で、路盤がさらに埋没した際の覆土と理解できるであろう。西側の部分は路盤面が地山となっているため、埋没が見られない状況が観察される。したがって、1SD01の直上の部分のみが沈下している。これは、地山の部分に比べて溝の埋土が柔らかいために、路盤強度に不均衡が生じたものと理解してよい。

出土遺物は、土師器(椀・片)・陶磁器(染め付け椀)があるが、遺物の報告では、裁割り時の遺物の報告の都合もあり、1SD01のⅠ層とⅡ層で報告している。

出土遺物からみて、道路は近世後半には廃絶してその使命を終えており、下層遺構の出土遺物からは中世前半には遡り得ないと思われる。

#### 溝状遺構

##### 1SD01 (Fig.48, Pla31)

1SF05の下層遺構となる大溝で、主軸の方位もほぼ一致する。上層の1SF05の埋土を除いて、埋没過程は大きく5段階に分けられる。その区分に応じて層序に従って掘り下げを行った。Ⅵ層までの埋没が終わった段階でも、相当の流量があったか、または溝浚えが行われたようで、Ⅴ層は最深部が地山まで達している。それよりも上位はレンズ状堆積である。掘削した当初は逆台形の断面形状を呈していたものが、埋没したのがってレンズ状断面に変化する様子が観察できる。

出土遺物は、土師器(坏・皿・椀・片)・瓦器(椀・盤)・磁器(碗・竜泉窯系青磁碗Ⅰ-5・花瓶)・陶器(碗・鉢)・黒曜石(剥片)がある。

##### 1SD02 (Fig.49, Pla37)

調査区の中央附近に位置する。1SD03に切られている。幅0.2m深さ0.1mで、僅かに屈曲する。出土遺物は、土師



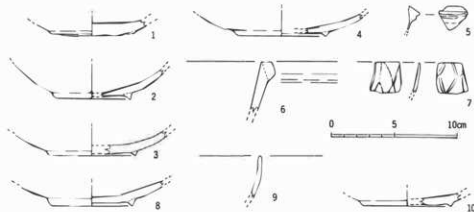


Fig.50 1SD01出土遺物実測図 (1/3)

照されたい。

#### 1SD01出土遺物 (Fig.50、Pla33)

裁切り時の出土遺物と、層序に従い分層して掘り下げた際に出土したものに分けられる。裁切り時には、上層の1SF05も同時に掘削しているため、遺物は混じってしまっている。また、I層は1SF05の覆土となるので注意されたい。

1~3は瓦器碗の底部である。5は不明土製品である。下部は非常に薄くなっている。6は土師器の土鍋である。9は土師器の碗で、口縁端部まで均一の厚みを持っている。



Fig.51 周辺表探遺物実測図 (1/3)

#### 周辺表探遺物 (Fig.51、Pla33)

11は須恵器の脚台である。よく焼き締まっている。

#### (4)小結

今回の調査では、思いがけず道路状遺構を検出した。しかも大溝の上層遺構であったため、大溝埋土・道路側溝埋土・道路廃絶後の埋没覆土の関係を現地で理解することが必要であった。平面分層で状況理解に努めたが、平面での理解は困難な状況であった。そこで、やむを得ず調査区際を2ヶ所裁切り土層断面を確認することとした。

土層断面の観察を行うと、①大溝のはは直上に道路状遺構が乗っていること②大溝の西側にある溝状

No	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	部高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	西端面	外端面	色調	胎土	焼成	口縁部形状	備考	R-No
1	1SD 01		瓦器	碗	6.5			底部1/8	横ナテ	ナテ	ナテ	横ナテ	横ナテ	淡黒灰色	密	やや良			4
2	1SD 01		瓦器	碗	6.0			底部1/8	横ナテ	ナテ	ナテ	横ナテ	横ナテ	淡白灰色	密	やや良			3
3	1SD 01		瓦器	碗	6.8			底部1/4	横ナテ	ナテ	ナテ	横ナテ	横ナテ	淡灰茶色	密	やや良			2
4	1SD 01		土師	碗	7.0			底部1/4	横ナテ	ナテ	ナテ	横ナテ	横ナテ	淡茶白色	密	良			1
5	1SD 01	I	土師?	不明				紙片	ナテ	ナテ				淡茶白色	密	良			2
6	1SD 01	I	土師	土鍋					口縁細片	横ナテ	ナテ	ナテ		明褐色	密	良好	玉縁状		1
7	1SD 01	I	埴付	碗					口縁細片	施軸	施軸	施軸		黄地:明灰白色 輪帯:淡緑青色	密	良好	外側に編目文を手掻きする		3
8	1SD 01	III	土師	碗	6.4			底部1/4	横ナテ	ナテ	ナテ	横ナテ	横ナテ	淡茶灰色	密	良			1
9	1SD 01	IV	土師	碗					口縁細片	横ナテ	ナテ	ナテ		淡黄褐色	密	良			2
10	1SD 01	IV	土師	碗	7.0			底部1/4	横ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	淡灰褐色	密	良			1
11	周辺表探		須恵	脚台?	8.4			底部1/4	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	明青灰色	密	良			1

Tab.10 尾島下町裏遺跡出土遺物観察表

## 尾島下町裏遺跡（第1次調査）

遺構とあわせて両側側溝を持つ道路構造となること③道路廃絶後にさらに覆土が被り路盤が埋没していること、の3点が理解できた。そこで調査区の中央部分に太く残したベルト状の部分層序に従って分層掘削した。

まず路盤の覆土を取り除き、さらに側溝部分を完掘した。側溝は埋土が単一土層であるから、短期間で急速に埋没したか、道路廃絶の直前まで管理が充分になされていたものを廃絶時に一度期に埋めた可能性が高かろう。加えて、路盤の一部に硬化面が認められたことは、道路として認知してよい情報を提示していると思われる。

また、当遺跡のすぐ東側は近世の在郷町の尾島町として著名である。町囲の西側に隣接するように今回の調査区は設定された訳であるが、道路の方位（N-16°-W）は町囲の方位（N-10°-W）に近いもののやや西に振っている。したがって、近世の道路の規格には合致しない。出土遺物からみてもそれ以前の時期に比定する方が適切と思われる。また、古代の官道西海道は当遺跡の200mほど東を走ることが近年の調査（註1）で確認されており、この2者の間を繋ぐ時期の道路上遺構として注目される。また、道路幅員は3m程で西海道の7m前後と比すれば見劣りするものの、市内で確認された他の道路（註2）と比べて大きく見劣りするものではない。さらに両側側溝を持つことから地域の主要な道路と位置付けることも可能である。

いずれにせよ、幅3mの調査であるため、この道路が何処と何処を結ぶ道路であるかなどは全く不明である。今後も予期しない場所で道路上遺構の発見がなされることと思うが、資料が一定の集積をみれば筑後市内の道路環境の復元が試みられるようになろう。

註1 筑後市文化財調査報告書第36集「筑後東部地区遺跡群VI」筑後市教育委員会 2001

筑後市文化財調査報告書第45集「筑後市内遺跡群IV」筑後市教育委員会 2001

筑後市文化財調査報告書第49集「羽犬塚山ノ前遺跡」筑後市教育委員会 2002

註2 筑後市文化財調査報告書第9集「櫻崎遺跡」筑後市教育委員会 1993

筑後市文化財調査報告書第41集「久富綿打遺跡」筑後市教育委員会 2002

筑後市文化財調査報告書第49集「羽犬塚山ノ前遺跡」筑後市教育委員会 2003

## 10. 尾島前田遺跡（第1次調査）

## (1)はじめに

今回の調査では、水路部分のうち遺構の確認された部分を調査した。調査区の規模は幅3m延長27mであった。当初は水路の計画がなかった箇所であるが、排水計画の変更によって水路が新設される箇所のうち埋蔵文化財が認められた部分について発掘調査を実施した。現地での調査は平成10年3月16日から平成10年3月30日までおこなった。調査は永見秀徳が担当したが、末吉隆弥の協力を得た。

## (2)遺溝

幅2mという非常に細長い調査区の設定を余儀無くされた上に、調査区の中で鋭角に屈曲するという形状となった。しかも内側には民家がある関係上調査区の両側では見通しが全く利かない状態となった。このことは発掘調査現場での安全管理面でも好ましい状態ではなく、以後は何らかの対策が必要であると痛感した。

検出遺構は溝状遺構・土坑・小穴等があるが、東西調査区の南側は1/3を攪乱によって失われており、幅の狭い調査区で更なる障害となった。以下、遺構種類別に報告する。

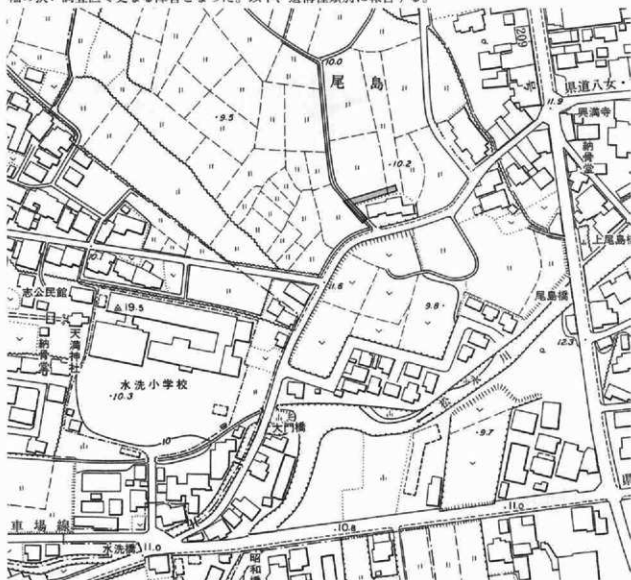
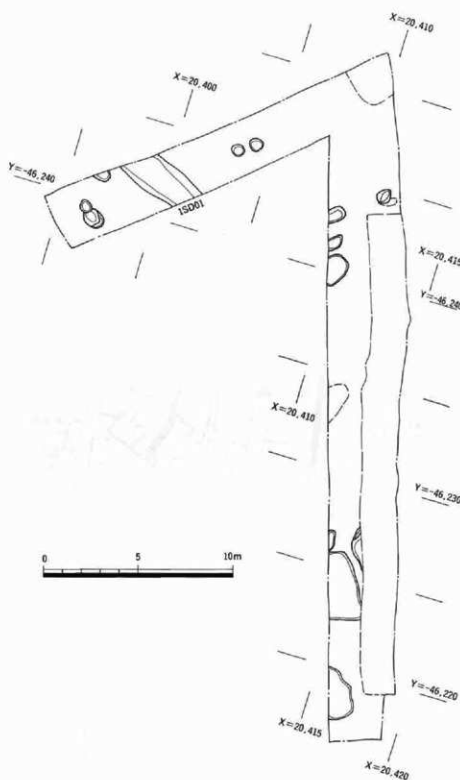


Fig.52 尾島前田遺跡（第1次調査）調査区位置図（1/2,500）



**溝状遺構  
1SD01 (Fig.53)**

南北調査区の南寄りに位置する。切り合い関係はなく、幅2.0m深さ0.4mを測る。礫混じりの堅い地山に、非常に良く似た埋土であったため、検出には非常に苦勞した。掘削も礫混じりの良く締った埋土に作業員が悲鳴をあげる場面もあった。完掘したところ、断面は逆台形であったことが判明した。

なお、埋土中から竜泉窯系青磁碗が出土したが、小片のため図示できなかった。判然としないがI-5類か。

**土坑**

数基を確認したが、いずれも残存する深さが0.1mから0.2mと浅いもので、出土遺物も皆無である。

**(3)小結**

今回の調査では、1SD01に漠然とはあるが中世という年代を与えられるのが唯一の成果といってもよい。周辺の調査事例をみても中世には縦横に流路や区画溝が走っており、今回確認したのも、そうしたものの一つにあたると見てよい。今後資料集積が進んだ時点で環境復元を行うときに、今回の成果が役立つことを期待したい。

Fig.53 尾島前田遺跡調査区全体図 (1/200)

### 第三章 まとめ

今回の報告で、西部第2地区遺跡群の報告書は7冊目となる。常用地区と水田地区での報告を残すのみとなった。志地区と尾島地区は今回で報告が完了したことになる。水路敷を対象とした細長い調査区の設定を余儀無くされたため、面的な古環境の復元には程遠い。しかし、これまでは北側の裏山遺跡や近世の尾島町ぐらいいしか埋蔵文化財の所在が明らかでなかった当地域において、発掘調査を行ったこと自体が非常に重要な意味をもつ。

一連の調査で、縄文時代早期の石組み炉などもみつき、この地域に早い段階から人間の足跡を認めることができた。それと同時に、この地域の歴史の解明が市域の歴史の解明にとって重要な意味を持つことも明かとなった。今後の発掘調査の進展次第ではあるが、この地域から得られる新発見に期待したい。

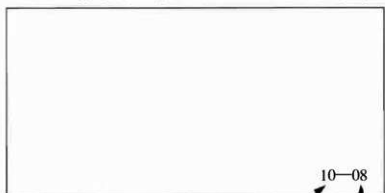


調査風景（常用ニラバ遺跡第1次調査）

# PLATE

## 凡 例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。



10-08

Fig. 番号

遺物番号



常用ニラバ遺跡第1次調査 西調査区全景 (西から)



常用ニラバ遺跡第1次調査 中央調査区全景 (東から)

Pla.2



常用ニラバ遺跡第1次調査 東調査区全景（東から）



1SK01 土層断面（北西から）

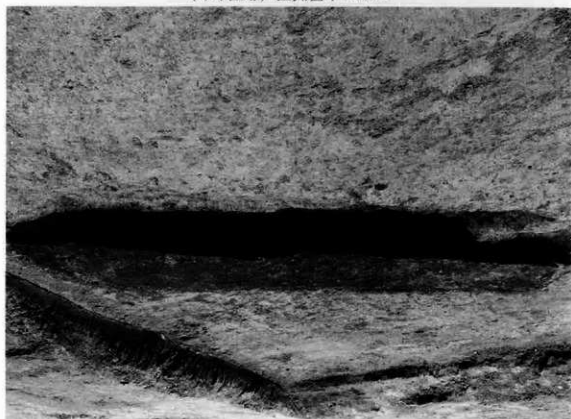




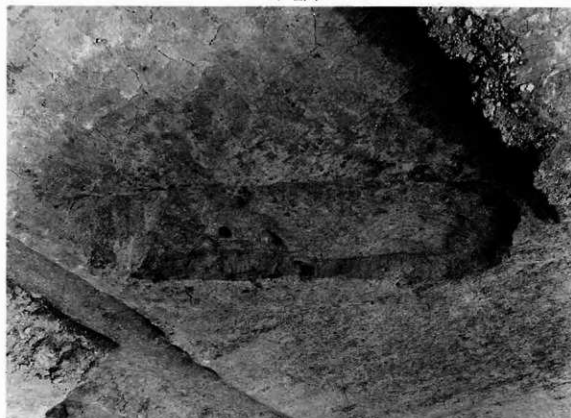
ISK01 完掘 (北東から)



ISK01 完掘 (北西から)



1SK05 土層断面 (北西から)



1SK05 完掘 (北西から)



1SD16 完掘（南から）



1SD18 完掘（南から）

Pla.6



1SX10・1SX25・1SX30 完掘（南西から）



1SX15・1SX20 完掘（南西から）



1SX35・1SX55・1SX65 完掘（南西から）



1SX40・1SX45・1SX50・1SX60 完掘（南西から）

Pla.8



13-1



14-5



14-2



15-6



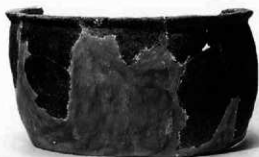
14-3



15-9



14-4



16-11



16-12



常用相制遺跡第1次調査 調査区全景 (東から)



常用相制遺跡第1次調査 調査区全景 (西から)





1SD201 完掘 (北から)



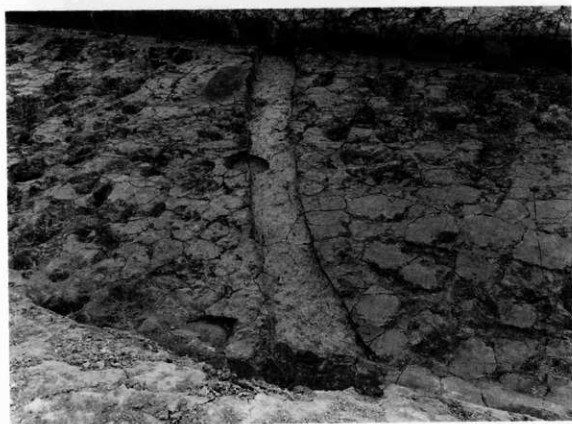
1SD202 完掘 (北から)



常用野々下遺跡第1次調査 調査区全景（東から）



ISD101 完掘（北から）

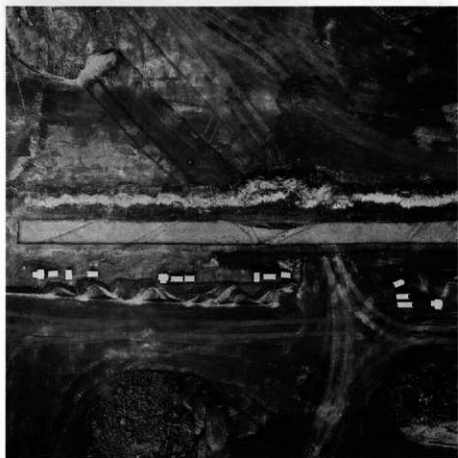


ISD104 完掘（北から）

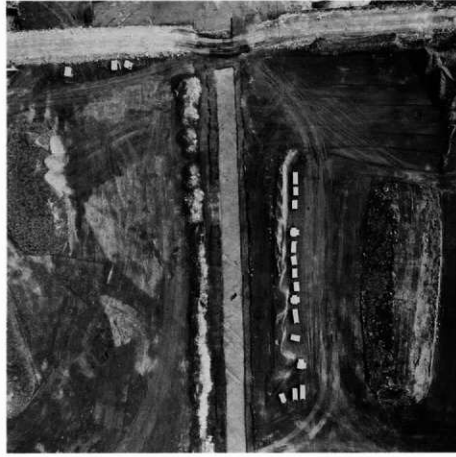
Pla.14



志野添遺跡  
第1次調査  
調査区全景  
(東から)



西調査区  
西半部分  
(上が北)



西調査区東半部分  
（上が北）

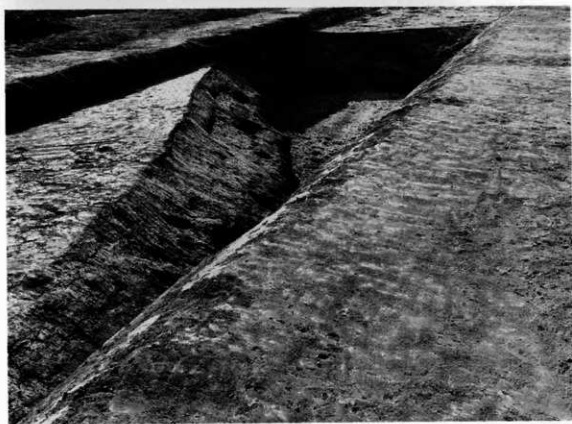


南北・東調査区  
全景  
（上が北）

Pla.16

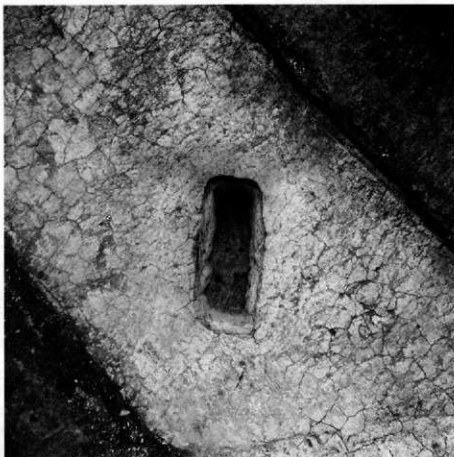


1SD02 完掘  
(上が北)



1SD02 完掘（北西から）

1SK05 完掘  
(上方北)

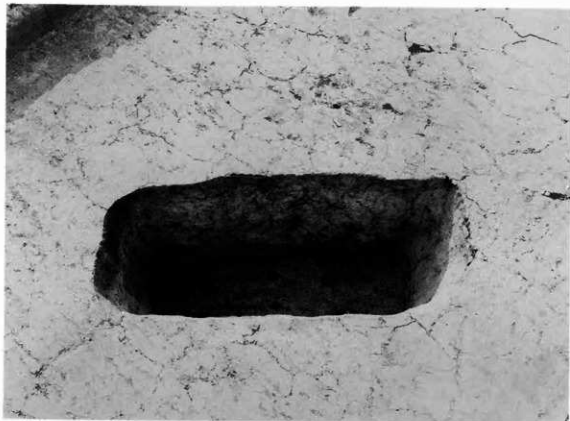


1SK05 土層断面 (北東から)

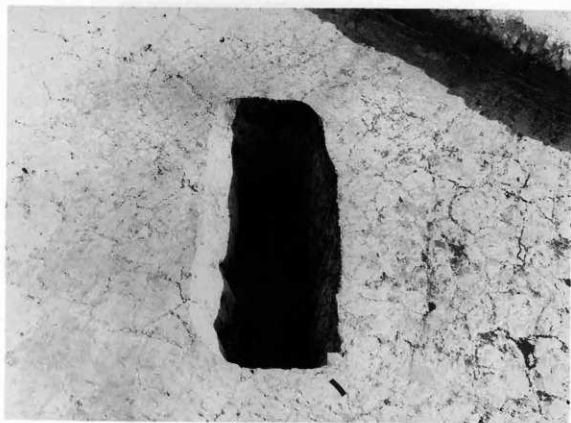


Pl.a.17

Pla.18



ISK05 完掘 (北東から)

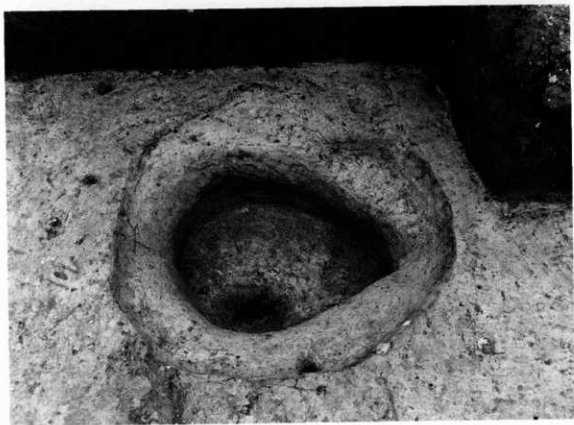


ISK05 完掘 (北西から)





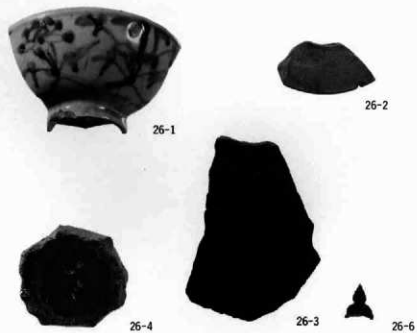
1SK10 土層断面 (北から)



1SK10 完掘 (北から)



ISK10完掘（南から）



志野添遺跡第1次調査出土遺物



志上婦計遺跡  
第1次調査  
調査区全景  
(上が北)



志上婦計遺跡  
第1次調査  
調査区全景  
(北東から)

Pla.22



ISD01 土層断面（北から）



ISD01 完掘（北から）



30-1



30-4



30-2



30-6



30-3



30-10



31-11

Pla.24



志上婦計遺跡  
第2次調査  
調査区全景 (上が北)



志上婦計遺跡  
第2次調査  
調査区全景 (北から)



2SD01 土層断面（北西から）



2SD01 完掘（北西から）

Pla.26



2SK02 土層断面 (東から)



2SK02 完掘 (北東から)





2SD04 完掘 (北から)



36-1



36-2

Pla.28



志藪内遺跡第1次調査 調査区全景（東から）



1SD01 完掘（北から）



1SD02 完掘（北から）



4-1

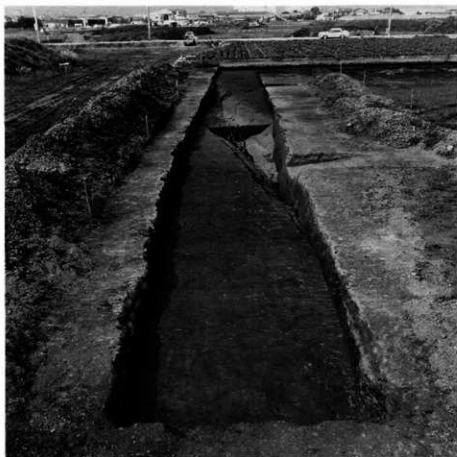
Pla.30



志西田遺跡  
調査区遠景 (東から)



志西田遺跡  
調査区遠景 (西から)

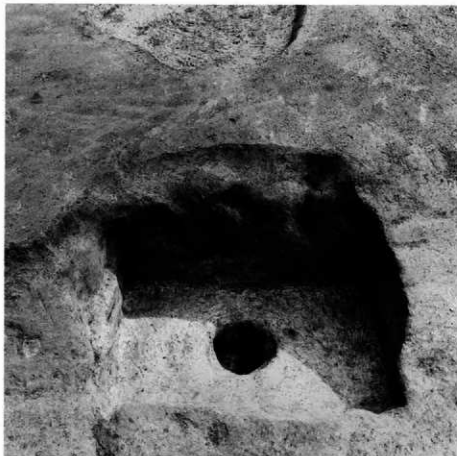


志西田遺跡  
調査区遠景 (南から)

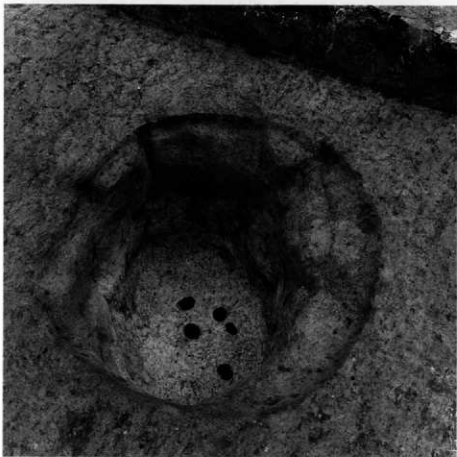


志西田遺跡  
1SD20 (北から)

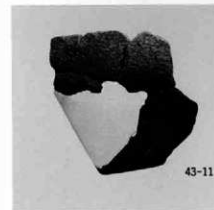
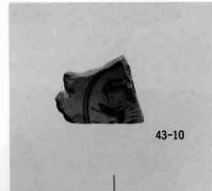
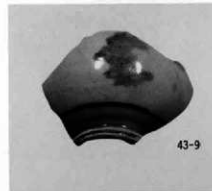
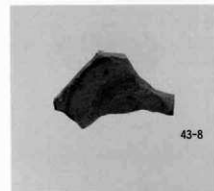
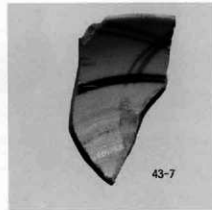
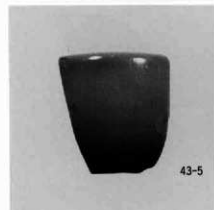
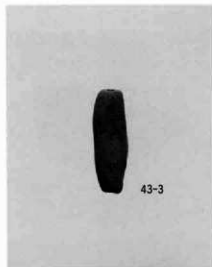
Pla.32



志西田遺跡  
ISX05 (西から)

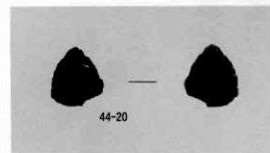
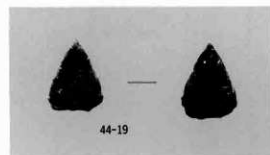
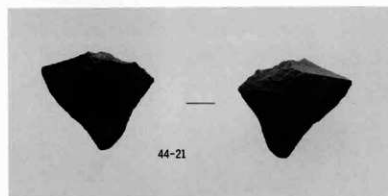
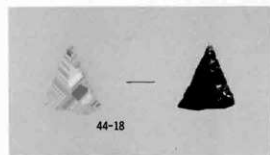
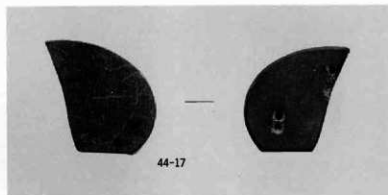
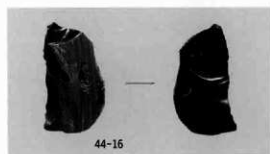
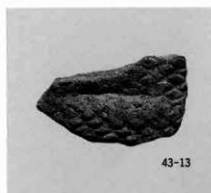


志西田遺跡  
ISX10 (西から)



志西田遺跡第1次調査出土遺物①

Pla.34







尾島下町裏遺跡第1次調査 調査区全景（西から）



ISF05 完掘（北から）



ISD01 土層断面（北から）



ISD01 完掘（北から）



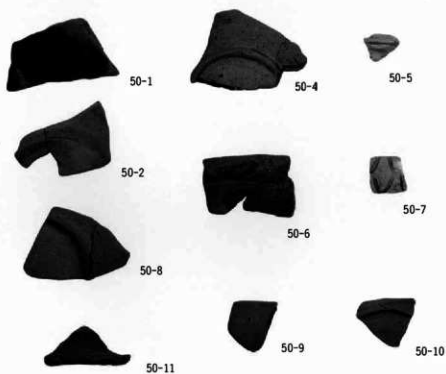
1SD02・2SD03 完掘（北から）



東側土坑群（北から）



西側土坑群（北から）



尾島下町裏遺跡第1次調査出土遺物



尾島前田遺跡（第1次調査）調査区全景（北西から）



尾島前田遺跡（第1次調査）調査区全景（西から）

筑後西部第2地区遺跡群(Ⅶ)

筑後市文化財調査報告書

第51集

平成15年3月

発行 筑後市大字山ノ井898

筑後市教育委員会

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市天神一丁目1番32号